
涼宮ハルヒの世界へ・・・

カッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの世界へ・・・

【Nコード】

N2475U

【作者名】

カッシー

【あらすじ】

ある時、おれは死んだ。だけど、それが俺にとっての人生の始まりだったんだ。神様とやらに転生されて涼宮ハルヒの世界へ。異世界人として原作を崩壊させてやるぜ！

転生（前書き）

この小説の他に主体の小説があるので、更新は遅れそうです

転生

「危ない！」

その声が聞こえたのがこの世界での最後の言葉だった。後ろを振り返るとトラックが迫っていた。逃げる間もなくぶつかってしまった。

「ここは？助かったのか？」

目を覚ました俺は周囲を見回す、そこは何もないただ白い空間だった。俺は浮かんでいた。

「なんだここ？絶対に病院じゃねーよな」

「目を覚ましたか」

光の玉が現れた、浮かんでいる

「うわっ！なんだこれ」

「心配するな、何もせん」

光の玉はしゃべった

「しゃべった？なんなんだお前は？」

「お前とは酷いな、私はこう見えても神じゃよ」

「神?!こんな光の玉が？」

「ひどいのう、お主ら人間にはわしの姿は見えん。だからこうして光の玉になっっているのじゃよ」

意味がわからない、いきなり光の玉が現れて私は神だと？信じられねえ

「信じなくてもよいぞ」

「人の心をよんだ？」

「まあそりゃ神じゃからな」

たしかに、人の心は神様ぐらいしか読めそうにないことは…

「分かった。話は聞こう」

「そうか……では話そう、まず、お前は死んだわしの手違

いでな」

「は？じゃあなんで俺はここにいるんだ。そして手違いとはなんなんだ？」

「まあまで、それを今から話そう。お主はわしが間違えて殺してしまった。本当ならあの時助かったはずなのだ。」

「神様とやら死んだのは分かった、じゃあなんでここにいるんだ」

「待てと言ってるだろう、……お前は転生する。だから浮いておるのだ」

「転生？」

「そうじゃ、私の手違いで死んでしまったからな。お主にはもう一度人生を歩んでもらう」

「ちよつと待て。じゃあ俺がもといた世界に戻せばいいじゃねーか」

「無理じゃな」

冷たく言い放つ神様じゃあ俺はどの世界へ転生するんだ？

「それは……『涼宮ハルヒ』が存在する世界」

また心をよみやがった……ってええ！

「待てよ『涼宮ハルヒ』の世界ってのはあの涼宮ハルヒか？」

「そうじゃ、そこに転生してもらおう」

涼宮ハルヒシリーズ

ライトノベルの作品だ、おれも読んでいる。だがそれはあくまで本の世界。どついう事だ？

「その本の世界が実際にあつたとしたら？」

「は？」

あつたとしたらーいや、あるはずがない

「あるんじゃよ」

「とつう事は原作を変えちまつつていつ事なのか？」

「いやいや、それはないお主が転生する涼宮ハルヒの世界はあくまでパラレルワールド。原作が変わる事はない」

「とつう事は好き勝手していいんだな？原作介入しても」

「ああ、そうじゃ原作介入してもしなくてもいい。とつう事でもあ
るお主の自由だ」

「俺に拒否権は？」

「ない」

速攻で否定される。

「その代わりに、3つなんでも願いが叶うこの紙をやるう」
紙を渡される

「この紙に何かを書けばその書いた事が現実となる。常備品と言っ
事で持つてる」

「分かった」

「後、お前は1時期この話をした記憶がなくなる」

「なんでだ？」

「幼い頃から異様な才能を発揮したり喋れたりしたらおかしいじゃ
る」

「そういう事が」

「生まれた年は涼宮ハルヒと同じだ記憶が戻るのは個人差はあるが、
小学3年生ぐらいにこの話を思い出すじゃろう。記憶が戻った時、
お主になんでも叶う紙を渡そう」

そう言った後、1呼吸おいて話した

「わしの話は以上じゃ。質問はあるか？」

首を横に振る

「そうか、では異世界人よ頑張ってくれ」

「頑張つてやるよ」

そう言った瞬間、俺の目の前は真っ暗になって意識を失った

転生（後書き）

感想アドバイスなどよろしくお願いします

出会い(前書き)

2話目です。

疲れた

出会い

だるい、そう感じた。と言うか最近はずっとそうだ。俺が涼宮ハルヒだったら閉鎖空間を生み出しかねないなと思う。

只今小学4年生だ、俺の転生する前の記憶が戻った学年。まず思い出した結果があれだ、ライトノベルコーナー、そこをたまたま通りかかると。すると一気に情報が流れてきた、そりゃもう怖いほど、まあそれがきつかけだな。

家に帰ると、3枚の紙があった。きっとこれがなんでも叶う便利グッズだ

まあそんな訳で今学校にいる、俺の今の名前は中村岳斗、普通の家庭に育てられている。勉強は学年1位だ、まあそうじゃなきゃいけないが

「がくー」

「なに？」

声をかけてきたのは工藤だった

「今日遊べる？」

「ごめん、今日無理」

「えー、最近全く遊んでないよな」

「おー！すげえ！！」

「何が凄いんだ？」

お得意の疲れました顔で言う。生で見るとすげえな感動する。落ち着くんだ、よし！

「こつちの話だ、何かさがしてんのか？」

「へ？ああ、ちょっとキーホルダー落としちまって」

「そうなのか？じゃあこうなったのも何かの縁だ探してやるよ」

「マジかサンキュー」

そう言って探しはじめる、30分後、そのキーホルダーは見つかった

「悪いいな、付き合わせちまって」

「いやいや。別に、暇だったし、全く気にしていない」

「そうか、ありがとな。お前名前は？」

「俺か？俺は中村岳斗お前は？」

「俺は……だ。皆にはキョソって呼ばれてる」

「そうか、よろしくな、キョソ」

「ああよろしく」

そう言っただけで別れた。いや、有意義な時間だったな、あれがキョンなんだよな。すげえな。興奮を隠せないな

家に帰って決めた紙に書く1つ目の願いを「俺が嫌だと思っただけの情報変更を俺は受け付けない」そう書くと紙が消えてどっかへ

行った

「これで大丈夫だろ。少なくとも消失の影響は受けられない」

そう呟いて、初めて記憶を取り戻した後に楽しみにする事が出来たなど思った。そう俺は原作に介入する事を決めた。まあいろいろあるかもしれないけど、大丈夫だろ。

その後、俺は最大の決断に責められる事になる。それは…

どっちの中学へ行くかだ、運よく（多分神様がやったんだろ）どっちに入ってもいい区分になっている

もしキョンの学校へ行くとしてしよう。そしたら佐々木とか国木田にも会えるだが、原作には中学校時代の介入はほとんど出来なくなってしまう。逆に涼宮ハルヒの学校へ行くとしてしよう。すると、涼宮ハルヒとも知り合え谷口とも会えるし原作介入も可能だ。しかし、涼宮ハルヒとは仲良くなれるとも思えない。奇跡でも起きない限り。

「うーん迷うな」

「どうしたんだ？ 岳斗？」

工藤が聞いてきた、

「いやね、中学校どっち選ぼうかなと思ってて」

「そっか、そっぴやお前はどっちでもいいのか」

「あぁまぁな」

話を聞くと工藤は涼宮ハルヒの通う予定の学校つまり東中に通うらしい

「お前も東中はいれば？いいと思うぜ」

そう言って去って行った。よし！決めた

「東中に行こう！」

大きな声で叫んだので、少し視線がくる。あわてて口を塞ぐ

まぁそんな理由で中学校は涼宮ハルヒの通う東中に決まった

出会い（後書き）

ホントになんか凄くだるいので、間違いが大量にあると思います。
感想アドバイスなどお待ちしてます！

東中入学（前書き）

3 話目ですーじじい

東中入学

東中に入学した

東中に入った理由は2つある

1つ目

涼宮ハルヒと一緒にいれば原作介入が簡単

2つ目

キョンや佐々木とは中3の時塾で知り合えば良い

以上だ涼宮ハルヒとは校庭落書き事件の時知り合えば良いと思っ
ている（仲良くなれるかどうか分からないが）

「よう工藤」

「岳斗も東中に入ったの？よかったー」

「心配どうも」

「いやいや、それ程調子乗ってねーよ」

「乗ってんじゃねーかよ」

と言って笑い合った。東中のクラス掲示板は混んでいる

「クラス見てくる」

「え？いつもならお前が見てこいとか言うのに」

「俺もたまには見てやるよ」

と言うのは全くの嘘で涼宮ハルヒがいるか谷口がいるか確認したか
つたつて言うのが本音。そんな事で、人混みを無理矢理通りクラス
掲示板を見る……

「いたか…」

しっかりと俺のクラスには谷口と涼宮と言う名前が書いてあった

「分かった」

「で？どうだった」

「面白いクラスになりそうだ」

「は？」

工藤は意味の分からないようだったが分かるはずもない

「行くぞ、俺たちのクラスへ」

「あ！ちょっと待てよ！」

急いで追いかけて来る工藤を見ながら呟いた

「最初はどつするか…」

まずはタイトル通り「涼宮ハルヒの憂鬱」にしなければならぬから……。そのためにはまず……校庭落書き事件は見に行く3年後のキョンに会いたいからな。そういう事ならうーん、原作介入って結構難しいな

「おい……おいって!」

「何?」

「ずっと返事してなかったからちよつと心配した大丈夫か?」

「別に……ただの考え事だ」

「所でどこなのクラスは」

「ここだよ」

そう言うて中にはいった。すぐ先生が入って来てから自己紹介、涼宮は高校生の時の自己紹介よりは良かったと思う。しかも俺にチャンスが何と谷口が1つ前の席だったのだ

「よう……岳斗だったか?よろしくな俺は谷口」

「そうか、よろしくな谷口」

原作キャラと関わった事が嬉しかったまあそういう事で俺は谷口と工藤と共に七夕の季節まで遊んで信頼を深める事に決めた

東中入学（後書き）

今回短めでしたがどうだったでしょうか？感想アドバイスなどよろしくお願いします！

七夕(前書き)

4 話目です！

七夕

「なあ知ってるか？」

七夕を控えた6月の下旬、谷口が話しかけてきた、谷口とは入学式から仲が良いよく、工藤と一緒にいる。いる。

「知らない」

速攻で答えを返す

「いや．．．．．そういうわけではなく、俺達のクラスに涼宮ハルヒとか言う奴いるじゃねーか」

おっ！ついに涼宮ハルヒの話か

「ああそれがどうかしたか？」

「ただの噂なんだが：七夕の夜涼宮ハルヒが何かを書くらしい。誰も怖くて行きたくないって言うて見ようとしなないけどな」

ついに七夕の噂がでて来たか。

「へへ面白そうだね」

「おい！やめとけよ、あいつは何するか分からんぞ」

「ああそうさせてもらおうか、俺も行きたくはない」

と言つのは全くの嘘で行く気満々

「そうか、ならいいんだけどよ。話は変わってあの女子の話なんだが……………」

こいつはいつも女子の話をする流石原作キャラだな

「えっと…涼宮は」

と言つて涼宮を見た不機嫌な目をしている。高校に入った時より酷いんじゃないのか

7月7日

七夕の日だ両親には友達と勉強会するから遅くなるって言った。さあ今は公園の近く金網が見える距離にいる。時間は午後9時前そろそろキヨンが来るはずなんだけど……………来た！あれ2人い

るあれは…俺か？

そうだあれは絶対3年後の俺だ、俺の1つ目の願いで宇宙人さんの情報改変を受け付けなかったから俺は大丈夫なのか…金網越しにキヨンは3年前のキヨンと朝比奈さんを見ている俺はと言うと、俺に今は来るなサインを出している。絶対俺だな。キヨンは俺に何かを話しているそして公園に入ったその時俺が俺に大丈夫サインを出したのは気のせいではないだろう

俺は東中の方に先回りしてキヨンを待った

「おーいちよつとそこの少年」

キヨンの声だ

「はい？」

返事をした

「俺は決して怪しいものではない」

キヨンは暗い所において顔を隠している

「顔を隠していたら誰だって怪しまれまれるよキヨン」

原作介入の第一歩だ

「何で俺が分かったんだ？」

「勘だ」

適当にウソをついたのだが

「嘘だな、おまえは何者なんだ？」

見破られてる

「何者って言われてもただの人間だな」

「いや違うな。俺が高校生になった時もそうだった、くわしい事は話せないけどな」

「高校生？キヨンは高校生だったの？」

出来るだけとぼけたふりをする、流石に分からなかったからか

「いや…すまん忘れてくれ」

「忘れるって言われても……まあいや。で何？キヨン」

よし、何とか回避！

「いや…東中に行く道をおしえてくれってな」

「何で？」

「ちょっと行きたいんだよ」

「そっなの？」

こちら辺は原作とは違うな。やはり俺が存在するからだろう

「分かったついて来て……で、その抱いてる子は」

その質問にキヨンは少し戸惑いながらも

「俺の姉ちゃん。眠り病でないつも寝てる」

「へ〜眠り病なんてあるんだ」

「あ…ああ」

そんな事を言いながらあるいていると東中につく

「ここだよキヨン」

「ああ、サンキューな岳斗」

「俺もついて行く」

「悪いがそういう事には行かない」

「何で？」

勘付かれないように聞く。キヨンはその答えに戸惑っていたが

「ここからは俺のプライベートタイムだからだ」

「納得できない」

「納得しろ」

そのほばいいわけのような言葉に少し口喧嘩をしていると

「なしてんのよ!」

俺とキヨンは黙ってその声の方角を見る。そこには涼宮ハルヒがいた

「なに!あんた達!怪しそうね、変態?誘拐犯?」

その質問にキヨンは答えた

「怪しいとは言ってくれるな、お前こそなにやってんだ?」

「決まってるじゃない!不法侵入よ!ちようどいいわ!あんた達!手伝いなさい!でないと通報するわよ?あんた達が誰だか知らないけどね!」

元気に言う事ではないと思う。流石涼宮ハルヒといった所か

ここからは原作と同じだった。違つとすれば俺が手伝わされた事ぐらいだな校庭落書き事件を。

「ねえ、あんた達、宇宙人つていると思う?」

「いるんじゃないの」

「未来人は?異世界人は?超能力者は?」

キヨンは答えた

「異世界人とやらにはまだ知り合ってないが、その手の輩は配り歩くほどいると思うぜ」

そう言ったあと、俺をキヨンが見る、一応まだ疑ってんだろ

「あんたはどう思うの？」

ここで俺にふるか

「異世界人、超能力者、未来人、宇宙人はいると思うぜ」

正しい事を言っただけ

「何で？」

さらに質問か

「楽しみたいから」

ちょっと涼宮のセリフに似てるかもしれないけどいいだろ。涼宮はその答えから笑顔になって言った

「あんた達、面白いわね！名前は？」

「岳斗だ、お前と同じクラス」

「ジョン・スミス」

「バツカじゃないの？」

「そうかもな」

ジョン・スミスはいいな。一回生で聞いてみたかったんだ

「それとアンタ同じクラスだったんだ」

「ああそうだ」

気づけよ！

「あの子は誰？」

「俺の姉ちゃん、眠り病でないつも寝てる」

俺が聞いた時と同じ答えを返す

「ふーん」

「ところでこれはなんだ？」

キヨンが質問する

「見れば分かるでしょ！メッセージよ！」

「織姫と彦星宛のか？」

その答えに涼宮は驚いている。さらに驚かせてやった

「メッセージの内容は、『私はここにいる』だったか？」

その答えにキヨンは振り向き、涼宮は驚きを隠せずにいる。そりゃ
そうだ

「何で分かったの!」

「まあ七夕だし、似たような事をした奴を知ってるしな」

「へえー」

そう言ったあと、少し涼宮は考えて言った

「帰るわ、目的果たしたし。じゃ」

そう言って帰って行った、残された俺とキヨン。キヨンが質問して
来る

「おまえ……………本当に何者なんだ?」

「別に……………ただの人間だよ」

「嘘をつくな、もう俺は騙されんぞ」

しょうがないな

「じゃあ一つヒントを」

「ヒント?」

「ああ、朝比奈さんが起きた時に長門の所にいけ、それがヒントだ
な」

そう言っ行って行こうとした時

「待てよ！何でこの時に長門を知っているんだ！」

その質問には答えず俺は家へ帰って行った

七夕（後書き）

疲れたー。感想、アドバイス待ってます！

翌日（前書き）

更新遅れてすみません！

翌日

校庭落書き事件の翌日ーつまり七夕の翌日、俺はまあ当たり前だがこの真夏日と言っても過言ではない日に東中に向かっているが、いま『冬眠』している三年後のキョン達の事を考えていた。

まだ俺は異世界人だという事はばれてはいないが、なにか特別な人と疑われている。長門は何と答えただろう。長門の情報変換は受け付けない力を持っているからバレはしないだろうが疑われてる事が前提に原作介入しなければならぬのか。そんな事を考えていると学校の前で笑いながら話している工藤と谷口を見つけた。

「よお、工藤達」

「あつ！岳斗じゃねえかちょっと校庭みるよ」

「ああ落書き事件の事か？」

「100%その通りだろうな」

「え？何で分かったんだ？」

「やっぱりな」

「いや、学校行ってる間に聞いたんだよ」

「へー」

「まあこんな感じでいいだろ」

「先にクラスに入ってるぞ」

「え？ああ」

見ていかないのか？っていう顔してたけどあいにく俺はもう見たのでな。

「おはよ」遅いじゃない、岳斗！」「……へ？」

ドアの前には涼宮の顔がアップで俺の目に写っていた

「うわあああビックリした」

「どうしたのよ、まあいいわ今日北高の前に集合いいわね！」

「ちょっと待て涼宮、いきなり何だよ」

と言うのが

「ところでアンタ、見ればみるほど普通の人間より顔がちよっといだけのなんの変哲もない顔ね、面白くないわ！」

「人の話を聞きやが」じゃあまた後でね」「……ハア」

こりゃ参ったキヨンの気持ちも少し分かる気がするよ

「おーい岳斗、いつ涼宮と仲良くなったんだ？」

げ！谷口

「たまたま話したけどな」

「嘘つくなよ、あの涼宮の顔、中学で初めて見たぞ」

「はいはい。せいぜいほざいてる五分で振られたやつ」

「な!？うるせえな!その言葉は禁句だって言ったる」

「聞いてねえよ」

と言って一人でブツブツ言ってる谷口を無視して机に戻った。そう
いや今日は席替えだな

「ハア……」

今日一体俺は何回ため息ついてんだ？

「前後の席なんて奇遇ね！」

そう、席替えで涼宮と前後の席になってしまったのだ。こりゃ振り回される運命にあっちまったようだな俺は

「ところでその紙は何なの？いつも持ち歩いているけど」

この紙の事か……どうしようかな

「これはよくあるオカルトグッズだ、母さんが買って来てくれた」

バレてもおかしくない言い訳だったが

「へーそんなオカルトグッズもあるもんねー」

と言ってそれつきり話しかけてこなくなった

「お！工藤も一緒の班か」

「うん、よろしくね岳斗」

谷口はまだブツブツ呟いてたが別の班だった。久しぶりにボーツと
してしまっていたので工藤の一言をき逃していた

「岳斗を殺して涼宮ハルヒの出方を見るか……面白くなってきた」

翌日（後書き）

どうだったでしょうか、この前の文と文章力が全くなくなってしまいました。感想、アドバイス、時間軸の問題についてあればください

見つかる訳ないジヨン探し(前書き)

今回も文才力0です。ああ文才がほしい

見つかる訳ないジヨン探し

「遅いわよ！罰金！」

もう放課後だ。約束通り北高に集合したのだが何故？

「五分遅刻したからよ！」

「たかが五分じゃねえか、五分ぐらい」

「ダメよ！その間にジヨンがいなくなったらどうすんのよ！まっ後で奢ってね」

「はあ……………」

最悪だ、ますますキヨンの気持ちがあつてきた。大変なんだなキヨン

「とにかく！岳斗、いくわよ！」

「えー」

そんな事を言いながらついて行く俺、どうせ見つからないのに

「まず下駄箱は……………」

と言ってしらみつぶしに涼宮はジヨンのはいてそうな靴を探す、おいおい他の人達が白い目で俺達を見てるぞ

「ちょっと岳斗！アンタも手伝いなさい！」

「はいはい」

そう言っただけで探す、ある訳のないジョンの靴を探すのだから涼宮の願望実現能力でも見つからないんだな

「ないわね、そっちはある？」

「こっちにもそれらしき物はないぜ」

「うーんじゃあ次は……」

と言っただけでどんどん場所を移動して行く。教室に特別室見慣れない場所まで行った。ってか大丈夫なのか？これ！？

「あーもう、いないじゃない！」

「落ち着けよ、落ち着かなきゃなにも出来ないぞ」

「落ち着いてられる訳ないでしょ！」

と言っただけでそばを向く、こりゃ不機嫌モードだな超能力者の皆さん頑張ってくれ……とまでは言えないので助言をしておこう

「まあ涼宮、冷静に考えてみる」

「何を」

「そのジョンはここにはいないんだろ？だったら未来にいるんじゃない

ねえの？」

「どついつの意味よ？」

未来と言つ言葉に反応する涼宮

「だから、そのジョンとかいう奴が未来人という可能性があるんだよ」

「なるほど……」

「まあだから北高だけではなく、その周りも探してみたらどうだ？
見つかるかもしれないぜ」

その言葉で涼宮は元気を取り戻したように

「そうよね！きつとそうだわ！今ごろ未来に戻ってタイムパトロールとかしてるのよ。よし！今日は暗くなってきたからおしまい！また明日ね！」

良かった、うん、良かった良かった決して嘘はついてないからな。
ただまだ長門の家でキョンは寝ているんだが。まあ一件落着！

「あっ！そうだわ明日奢ってね」

と言って元気に帰って行った、俺の財布一体どうなんだろう？

次の日、めんどくさい道のりを歩いて学校に向かっていると谷口が現れた

「おい、岳斗。聞いたぜ、昨日涼宮と北高にいたんだってな」

情報がはえーな

「ああ、まあ付き合わされたって感じだけどな」

「嘘つくなよ、付き合ってた？涼宮と」

「はあ？お前はバカか。あんな奴と付き合うバカがこの世にいる訳……結構いるか、あいつ外見はいいもんな」

「そつだぞ、もう学校にいたら絶対噂広まってるぜまあ頑張れよ」

「はいはい」

谷口に励まされた屈辱を覚えつつ学校につくと嫌というほどしらねえー男子達に睨まれる。お前らあいつの本性しってんだろ？何で付き合いたいんだ？

「おはよう」

そう言っただアを開ける。あれ？工藤がいねえ、あいつ休んだところ見たことねえのに……どうしたんだ？

「ちよつと岳斗！」

急に涼宮登場

「なんだよ」

「今日は公園の周りでジヨン探しよ！いいわね」

いいわねって聞かれても絶対に嫌と答える権利は俺にはないだろう

「いいですよ」

「よしっ！じゃあ決まり、絶対に遅れないで公園に集合ね！」

と言って俺の机の上から自分の机に戻って行った。ってか前後なんだから机に乗らなくて別にいいだろ！

そんな訳で俺と涼宮の見つかる訳のないジヨン探しを続けるのだった。ってか俺の財布もどうなの？

三人称で話します

とあるマンションに一人の少女と少年がたっていた

「あの子何者なの？試しに外国に移住させようと情報変換したけど無理だった」

「それだけ彼が特別な存在って訳だよ。最近彼は彼が涼宮ハルヒの鍵となってきたるし」

「へー面白そうね、私なんてあと三年待機、いいわよねいま涼宮ハルヒの監視をしている人は」

「そうでもないよ、結構気づかずにするの大変だしね」

と言って少年はため息をついた

「しかし流石にあの異常な情報フレアの中心にいたのが涼宮ハルヒ
ってすごいよね」

「ええ……まあ願望実現能力があるからね。けど原因不明なんて…
…」

「その時は鍵となる人を殺せばいいだけだよ」

「そうね……涼宮ハルヒの情報爆発も見ものだし」

と言って少女はナイフを取り出す

「そろそろ行くよ。長門さんにはれたらまずいしね」

「ええそうして。そろそろ行かなきゃ長門さんの事だからすぐバレ
るわよ」

「じゃあね朝倉さん」

「ええ、また今度工藤君」

そう言って工藤と呼ばれた人はドアを開けて帰っていった。好奇心
旺盛の子供のようにウキウキしながら

未来人の出現（前書き）

結構今回は急展開

最近他作品とクロスオーバーしてみたなとか思ってしまう。この作品じゃ出来ないと思いますけど、やってみたい！

未来人の出現

「こんにちは中村君」

「何で僕の部屋に貴方がいるんですか？」

俺の前にはSOS団のレギュラーメンバーが立っていた

「朝比奈さん」

こんな事になった前の事を少し話そう

「流石に二人乗りで坂を登るのは……ハアきつい」

「なにいつてんの！まだまね！」

七月の後半いつもの様に涼宮と一緒に北高へ行く上り坂を二人乗りで登る、という大変な作業を毎日していた

「ハア、しっかし暑いわねこの暑さどうにかならないのかしら」

因みに今日は炎天下だ

「バカヤロウこっちの方が暑いわ」

「当たり前でしょ」

テンメエ……と言おうとしたがやめた。地雷を踏むだけだ

「ところで今度の日曜日暇？」

「何だ？まあ特に何もないが……」

「じゃあ夏祭りに行きましょー！」

「夏祭り？」

「そう、夏祭り！」

夏祭りか……前世では行った記憶があまりない。思えばこんな事になるなんて思ってもいなかったよな

「行くか」

「それでこそ岳斗よ！じゃあ何からやりましょうか」

最近は涼宮もあまりジョン探しをしなくなった。流石飽きやすい性格でも言おうか。まあ見つかる訳ないジョンを探したって意味が全くないのだが

「夏祭りに計画なんているのか？」

「いるわよ！だって一秒たりとも時間は無駄に出来ないし、そっちの方が楽しめるからね！」

「無計画は無計画で楽しいんじゃないのか？行き当たりばったり的なのも」

「それもいいけど、私はこっちの方がいいよ」

「そうかい」

キョンがよく言う言葉を使ってみた。しかしやはり涼宮は涼宮だな

「じゃあ今日は自転車が遅かったから奢ってね！」

ホント涼宮だな涼宮のせいで今までこつこつ貯めてきた俺の貯金は消えて行ってしまった。と言ってもまだ結構あるが

そしていつもの様に俺が涼宮に奢って帰宅するといつものパターンなのだが俺はなかなか家に戻れなかった。何故かと言うと奢ってる時、涼宮が言った言葉がなかなか興味深かったからだ

「アンタ今日家に帰らない方がいいかも」

「何でだ？」

「よく分らないけどそんな気がするのよ！まっ、そんな気がするだけなんだけどね」

涼宮が言った言葉は多分つか絶対ホントなんだろう。嫌な予感とは何か、涼宮にとって嫌な予感なのだから俺にとって嫌な予感だとは限らない。だからって良い予感な訳でもないのだが

しかし家に帰らない訳にも行かないので、帰ってみると誰もいなかった。それで部屋で一人ゴロゴロしていると、急に朝比奈さん（大）が出現した訳だ。その時涼宮にとっての嫌な予感がこの事だと分かった

「何ですか？朝比奈さん」

「やっぱり私の事、この歳で認識してた訳ですね」

「まあ、そりゃあねとところで何か用があるためにこの時代に来たんですよね」

「ええ、その通りです」

何だろう、その用とは

「で、その用とは何でしょうか？」

用とは全く予想していなかった答えだった

「えーと詳しくは禁則なんですけど、貴方はキヨン君のいる学校に転校してもらいます」

「……は？」

いきなりの発言に俺はへなちょこな言葉しかだす事が出来なかった

未来人の出現（後書き）

次の話は転校する理由です。では！感想アドバイスよろしくお願
い
します

理由と能力

「どういう事ですか？朝比奈さん」

数十秒後、やっとの事で口が開けた自分はず、その事を聞いた

「えっとですね……詳しくは禁則ですけど、あなたが中学校時代に涼宮さんと一緒にいては危険なんです」

「高校生活の時にSOS団が出来ないからですか？」

その言葉にハツとした顔になる朝比奈さん、しまった口を滑らせた

「SOS団の事までこの時に知ってたんですか……分かりました、貴方なら分かるでしょう。無限ループする夏休みに、時間遡行、そしてSOS団の開設など色々な事が貴方の存在によって出来なくなってしまう、ですから貴方には今の内に転校してもらわないと困るんです。そしてそれが既定事項でもあるから」

「ですが朝比奈さん、それだけじゃ俺が転校する理由にはなんないですよ」

その通りだ、今の内に全てを終わらせる事が出来れば絶対に俺、異世界人や宇宙人、超能力者や未来人全員がハッピーエンドで終わるだろう。だからたとえそういう理由であっても、なかなか納得する事が出来ない

「それは……言えません。禁則事項です」

ついに禁則事項という言葉がでた、禁則という事は俺が知ってはいけない事。つまり転校しなければいけない理由か、高校生活の時に支障がでるか。とにかく何か理由があるという事だ。朝比奈さんが嘘をつくとも考えにくい

「分かりました、ですがどうするんです？涼宮には願望実現能力があるんですよ。きっと連れ戻されるに決まってる」

そう、そこが問題なのだ、俺には宇宙人の情報改変を受け付けられない能力ならあるが、涼宮の願望実現能力を受け付けられない能力は持っていない。

「何でもいいので、どうにかしてください」

どうにかしてください……か、という事は教えてくれないという事が

「何かヒントはあるんですか？」

「えーと、涼宮さんですね」

ヒントが涼宮って……何じゃそりゃ

「という事でとにかく頑張ってください！転校するまでのタイムリミットは九月初日です。細かい事はこれから説明するので。では私はこれで」

ちょっと待ってください！と言おうと思ったが時間遡行の方法を隠すための俺は気を失ってしまった

「畜生！なにも思いつかねー！」

それから数週間がたち、丁度不思議探索&ジョン捜しが休みの日俺は転校するためにどうすればいいか考えていた

「だいたいヒントが涼宮ってなんだ？何なんだよ！」

涼宮には神様のような力が宿っている。多分それがヒントってところだろう。だが考えるほど分からない。どうすればいいんだ？残り二枚の紙を使えば簡単なのだが……勿体無い

「願望実現能力か……」

涼宮はねがったら、それが現実になる……つまり俺、異世界人も何

かのきっかけを涼宮に与えてやれば力が芽生えるのではないのか？
例えば、異世界人は強い！って涼宮が言えば俺は強くなる。さらに
異世界人は平行世界パラレルワールドを行き来出来る！と言えば当然俺がもといた世
界にも戻れるだろう。だがそれでは楽しくない。だったらこんな
はいいんじゃないのか……異世界人はこの世界の力……つまり涼宮
の力を受けつける事は出来ない！とかな

「これで行くか……」

そして俺の「涼宮ハルヒの力を受け付けなくなる（そのまんま）」
作戦は実行されたのだった

理由と能力（後書き）

今回最後グチャグチャでしたね、すみません

既定事項

という事で作戦を考えたのだが……

「ダメだ！方法が思いつかん」

作戦は決まったのだが、方法が思いつかないのだ。涼宮に自分の力を自覚させてはいけないし、かと言ってそのままぼーっとしてる訳にも行かない。しかし、未来の俺が転校していると朝比奈さんがいうのだから、俺が思いつくのは既定事項だ、頑張れ！俺

「しかし思いつかない」

こうしてる間にも時間はどんどんすぎて行く

「うーん」

それから一時間たったのだが全く方法が思いつかなかったその時

「さりげなく聞けばいいんじゃないのか？」

さりげなく「宇宙人はどういう力を持つてると思う？」と聞いて最終的に「異世界人はどういう力をもってる？」と聞いて考えてる時にさりげなくアドバイスを与えてやればいいのだ。どうしてこんな簡単な方法を思いつかなかったのだろう。俺はバカだな

「よし、次の不思議探索の時にこれを聞こう」

と、心に誓った俺であった

「なあ涼宮」

不思議探索の日、いつもの様にジョン探しをするためあの恐怖の上り坂を二人乗りでこいでる時に涼宮に聞いた

「なによ」

「宇宙人ってどういう力を持つてると思う？」

「何でそんな事を聞くの？」

「いや、自分が興味を持って」

その言葉にふうんと言って涼宮は答えた

「宇宙人は……万能なのよ」

「万能？」

「そう、強いし何でも出来ちゃうスーパー戦士みたいな感じ」

「へえー」

スーパー戦士はどうかと思うがまあ合ってると思う

「超能力者は？」

「超能力者は……影で地球を守るヒーローみたいな感じ」

おいおい、スーパー戦士とヒーロー被ってないか？

「それで、未来人は？」

「未来人は……未来と過去を行き来できるタイムパトロールみたいな感じよ」

タイムパトロール……朝比奈さんはタイムパトロール似合いそうに
はないな

「異世界人は？」

さて、ここからが本題だ、ここで涼宮が間違った事を言ってしまう
と既定事項から大きくそれてしまう。それてしまうとどうなっ
てしまうのだろう。ドラゴンボールのトランク스가未来から来た世界と
来なかった世界の様に大きく変わってしまうのかどうか。

「異世界人は……うーん」

さあ俺！異世界人とかはこの世界の力を受け付けないと言ってしまえ！しかしもしここで俺が言ってしまったらどうなるのだろう。既定事項どつりになるのだろうか？言わなかったらどうだろう。涼宮がそのまま思いつかなかったら、俺には何の力も得られないで終わってしまうかもしれない。それこそ既定事項から外れた事だ。これは言わなければならぬのだと思う

「異世界人はこの世界の力を受け付けないとかはどうだ？」

「どつりいう事？」

「ほら、異世界人つてその言葉どつり別の世界から来た人間じゃないか」

「ええ、そうね」

「だったら神様が決めた運命とか相手が強制的に決めようとした事だつてこの世界だつたら逆らえたりするんじゃない？」

「そうかもしれないわね！ええきつとそうよ！岳斗よくやったわ！」

良かった〜これで俺は涼宮の力を受け付ける事が出来なくなり神のような奴〓涼宮からでも逃げる事ができる様になった。これで既定事項どつりだ

その後適当に駅前などそこらへんで不思議探索をして一日が終わった

「ありがとうございます」

「朝比奈さんか」

家に帰り自分の部屋に入ると、朝比奈さん（大）が立っていた

「これであなたは転校できるようになり、唯一涼宮さんに逆らえる人物にもなりました」

「これでいいんですか？」

「ええ、これが既定事項なので」

「もともと俺がこうなる事、分かってたんですよね。何で教えてく

れなかつたんですか？」

「貴方に自分で気づいてもらいたかつたんです。それに上がダメだと言ったので」

それじゃしょうがないか。言いたくても禁則事項としか言えないんだし

「分かりました。で、涼宮に伝えるのはいつがいいんですか？」

「早い方がいいです。できれば一週間以内に」

じゃあ夏祭りの時言った方がいいな

「了解しました」

「ではそろそろ時間なので、最後に貴方ならどんな危機も乗り越えられると信じてます」

そう朝比奈さんが言ったあと俺は気を失った。危機って……何だ？と考えながら

イレギュラーな存在

さて、今日は涼宮と約束した夏祭りの前日にあった学校で起こった俺が死ぬかもしれない事件を話そう。場所は学校だった。

「ハアハア」

涼宮と不思議探索をした後、転校するため、荷物を持ち帰るハメになってしまった。ただでさえ涼宮を後ろに乗せ自電車で北高までこいでるのに、東中に向かうのは結構キツイ。しかも北高に着くためにはあの地獄の上り坂をこがなければならぬので、疲れないはずがない。疲れないヤツがいるとしたら、そいつは多分サイヤ人だ。悟空にでもかめはめ波でも教えてもらえ。あ、もしかしたらナメック星人かもしれない。だったらピッコロさんに魔貫光殺法を教えてください。って話しがそれな戻そう

とにかく！俺は今東中に着いたとこだ。この暑すぎる夏に宿題をしなくていいのは運がいいのだけど、やっぱり谷口や、工藤と離れるのは……ってそっぴい最近工藤の姿を見かけない。どうしたんだろ？

「これと……これね」

「ありがとうございます」

職員室に入って先生に今までの教材やらなんやらを貰い、考えた

涼宮はどうなるのか？

涼宮は原作から見ると中学生時代、ずっと不機嫌だった。それは事実だ、しかしこの並行世界パラレルワールドには俺、中村岳斗という存在がいるおかげで、超能力者には会ったことはないが、多分閉鎖空間も縮小傾向にあると思う。つまり原作はもう変わってしまったのだ。その俺が涼宮の前から消えてしまったらどうなるのだろう。きっとその答えを夏祭りまでに見つけなければいけないだろう。慎重に答えを見つけないければ世界が終わってしまうかもしれない。全く、とんでもない神様だな

とか思いながら、自分のクラスのドアの前に着く

「何故だろう？」

この扉の前に何かがある様な気がするのはいのせいだろう、そう気のせいだ。ある訳がないそんなあの、朝倉とキョンとの件に似ている様な事などある訳がない。逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ！

そう自分に言い聞かせて先生から貸してもらった鍵を使ってドアを開ける。すると

「やあ」

はい、初の死亡フラグ立っちゃったー。おめでとう俺！って

「工藤じゃねえーか！」

「うん、そう俺だよ」

そう、目の前に工藤が立っていた、しかもあの道化師見たいな笑顔で。気持ち悪くはない、道化師見たいな笑顔だけど！ってそんな事考えてる場合じゃない！

「お前、何者だ？」

その言葉に反応する工藤は

「知ってるんでしょ？」

「さあな」

「ハハ、とぼけちゃって。まあいいや」

そう言って近づいて来る工藤、逃げたいのだが恐怖心で逃げられない。

何なんだーコイツ

自分はこの時本当は分かかってわからない振りをしてただけかもしれない

「本当は、お前の正体を聞きに來ただけなんだけど、朝倉さんが言ってるし、何より俺が興味持ってるから。だからー」

涼宮ハルヒの情報観測を見るために、死んで？」

ヤバい！そう直感的に感じて言い終わった後、出して來た拳を何とか避けて教室の隅っこに走る

「ハア、さつさと死んでくれない？あなた相手じゃ情報改変も使えないからはつきり言って面倒」

「じゃあ俺を殺すなよ！」

「無理、却下」

そう言っただけまた近づいて來る工藤

「工藤、お前って人間じゃなかったんだな」

出来るだけ時間稼ぎを！

「ああ、情報統合思念体によって作られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェイスだけど、知ってたんだろ？」

「さあ、何の事やらさっぱり」

何で今日に限って紙がないんだよ！チクシヨウ！不幸だ！

「まあいいや、じゃあー」

死ね」

今度こそ死んだか！そう思い目をつぶった

何分たっただろう、いや、数秒だったかもしれない

まだ死んでない？

もしかしたらドラゴンボールで生き返ったんじゃないのか?とか思
いながら恐る恐る目を開けると

「お前は……」

工藤がつぶやくその先には俺ではなく

「あなたは私の三年後のバックアップのはず独断専行は許されてな
い……この人間から手を引くべき」

そして俺の目の前にもその少女……次期SOS団部長、長門有希
がもちろん眼鏡付きバージョンでたっていた

宇宙人

顔、服、動作など全てが気持ちいいほどに長門有希である。実際に見た事はないけどとにかく気持ちいいほどに長門有希だ。

「情報改変が効かない人間に長門さんか……厄介だな」

「手を引かなければ情報結合を解除する」

「無理だと思っけど。やってみれば？」

そう言った瞬間、長門……ではなく俺に神の様なスピードで近づくと、それを長門がガードした。我ながら宇宙人だが見た目は女子の人に守られると少年として凄く情けない

「貴方は涼宮ハルヒにとっての最初の鍵。1%でも可能性を握っているのが貴方なら、私はその可能性を守るのは私の義務」

だからってこの状況じゃ安心できないよ？長門さん！

「スキあり！」

工藤がそう言うと長門に一発パンチを喰らわせるのだが

「うっ！」

急にもがきだす工藤

「貴方は朝倉涼子に劣らない程優秀。だから情報結合を解除するの

に時間がかかった」

眼鏡を外しながら言う長門。これで終わりかな？ってかあんまり時間経ってないかと思うんですけど長門さん？

「ああーあ、ここで終わりか。情けねえな」

工藤の周りにはたくさん光が現れ、どんどん工藤が薄くなって行く

「でも気をつけるよ？俺の様な急進派も実際近くにいるし……まっ！それまで楽しくやれば？」

「そうさせてもらっぜ、工藤」

「ハハ、最後まで面白かったよ。岳斗」

「俺もだ、工藤」

どんどん消えて行くそして……

「じゃあな」

その一言を残し、消えて行った

「消えたか……大丈夫か？」

「大丈夫。肉体の損傷はたいした事ない。今、結合を再構成する」

そう言うとどんどん傷が消えていく。なるほどこれはキヨンが言う事も分かる。俺は夢を見てるんじゃないのか？この言葉。実際に見

ると必ず言う言葉だと思う。

「ちょっと待て」

回復の途中、口を挟んだ

「なに？」

「眼鏡ない方がいいと思うぞ。ほら、俺って眼鏡属性ないし」

「……眼鏡属性ってなに？」

名言を言うのも三年前にして眼鏡は三年前からない事にしといた。俺も眼鏡かけてないバージョンの方が好きだからな。

そんな事を考えてると長門が立つ

「中村岳斗、近い内に私の家に来て欲しい」

「わ……分かった」

突然そんな事を言われると誰だって驚くと思う

「それよりこの教室、大丈夫なのか？」

「大丈夫、心配ない」

表情変えず、単調に話す長門。そう言って出て行った。先生方が気づかないのはきつと長門か、工藤が情報操作などをしたおかげであろう。最初にも言ったが気持ちいい程に長門有希だ。

「しっかし……工藤が宇宙人ね」

この世界は涼宮ハルヒの世界であって、俺の知らない涼宮ハルヒの世界。どんな異常が起きててもそれは絶対には言い切れない。それがたとえどんな事であっても。

「朝倉も出て来ると流石に嫌だな。朝倉は原作通り終わってほしい」
などとつぶやきながら荒れ果てた教室から持ち帰る荷物を探す

数分で見つけ出し、やっとの事で校門を出る

「涼宮に別れを告げなきゃいけないし、長門に会わなきゃいけないし、引越しの準備も……面倒くさ」

そんな事を考えてると急に俺の前にタクシーが止まる

おい、これ以上厄介ごとは

「初めまして、古泉一樹と申します」

増やさないでくれ……

アクセス三万越え、ユニークあと少して六千記念！パラレル番回編シンデレラマ

今回はタイトル通り、久しぶりにアクセス解析を見ると、アクセスが三万越えしていました！ありがとうございます！そんな訳で今回はパラレル番回編にしました。これは漫画版涼宮ハルヒの憂鬱にある、パラレル番回編に本編主人公、中村岳斗登場バージョン！ちなみに岳斗はパラレル番回編を知っているが、見た事はないという事と三枚の紙はない設定ですので、ご了承ください。では！どうぞ！

アクセス三万越え、ユニークあと少して六千記念！パラレル番外編シンデレラ

「はあ……」

深くため息をつく。俺、中村岳斗は涼宮ハルヒ原作の並行世界パラレルワールドに転生された筈なのだが、これまた神様とやらの手違いで、漫画版の涼宮ハルヒの世界、しかも俺は漫画版で聞いた事のある涼宮ハルヒの世界に来てしまった。非常に残念な事である。しかし何故かSO3社と言う芸能プロダクションに働く事になってしまった。しかもSO3団の団員付きで。しかし何故か長門がいなかった

「ああ〜退屈、何か面白い事無いかしら」

と、SO3社、社長涼宮ハルヒがダラダラしながら言う

「そんな事どうでもいいから、仕事しやがれ」

と俺が言うと、同じくSO3社、雑用のキヨンが

「まったくだハルヒ仕事をしろ」

と、同様の意見を述べた、ちなみに俺も雑用である。しかしハルヒは

「何？あたしは社長なのよ？小さい仕事は全部貴方たち社員に任せ
てあるじゃない」

「小せえ仕事じゃねーよ」

と、俺はハルヒに聞こえない様呟くが

「何言ってるんの岳斗、小さい仕事じゃない！この書類に印鑑を押すだけの簡単な仕事」

「印鑑を押すだけの簡単な仕事ではないぞ、ハルヒ」

キョンもすかさず反論するのだが

「うっさいわねー！私にはあんた達とは違って人類すべてがぶっ飛ぶ大スターを探してるのよ！」

「だったら窓を見る」

「わかってるわよ、見てるじゃない」

今、俺が言ってからだろ？と、突っ込みたかったが流石にこれ以上言っとハルヒは大爆発するのでやめておいた。キョンも同様だ。ちなみにSO3社とは、『世界を大いに盛り上げるためには地球を三回爆破するのやむなし社』である、そこで突っ込みたいのが何故三回なんだ？爆破すると、盛り上げるどころか、地球が爆発してしまうのではないのか？この二つである。もっとあるかもしれないが、省略

「中々これと言ったスターの卵はいないものですね」

と、次に話したのが副社長古泉一樹、おい古泉、お前も働け

「すみません、私が売れないばかりに……」

と言つのが所属アイドル朝比奈みくる、この世界でもお茶運び係り。

いったい何のためにこのSO3社に来ているかと言うと、心のオアシスだから。そして売れない原因は朝比奈さんではない

「朝比奈さんのせいじゃありませんよ」

と、キヨンが言う。そう！朝比奈さんのせいではない！ハルヒ！お前のせいだ！

「何か言った？岳斗」

「な……何も言ってますんよ、社長様」

流石ハルヒ！心を読むとは！この世界では超能力や未来人は関係ないらしい。少なくとも朝比奈さんと古泉は。宇宙人はどうだか分からないのだが。そんな事を思っているとハルヒは急に大声を出した

「いたっ！」

そう言っただけに階段に駆け寄る。おい、何がいたんだよ？まさか新しいアイドルか？

「おっ……おい！ハルヒ！」

キヨンも追いかける。それと同じく俺もハルヒを追いかけた

「ビビっと来たわ！あれこそ逸材よ！」

その逸材って誰なんだよ……

「待ちなさい！」

と言ってハルヒその後にはキヨン、次に俺という順番で。ってかあれ
って……あの制服と髪型って……

「あなた大スターになれる器ね！うちでアイドルやりなさい！」

こんなのよくある事だ（ハルヒだけ）そんなスカウトOKされる訳
ねーだろ。キヨンも絶対そう思ってるぞ。しかし……

「了承した……」

振り向くその姿は長門そのもの。と言うより長門だ。長門……えー
！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！
？この世界では長門もきつと普通の人間なんだろ？OKすんのか！

「素晴らしいわ！これは縁ね！前世からの縁！」

と言って進めるハルヒにキヨンが止めにかかる

「あんな君、乗ってやる事はない」

まるで最初にSOS団の本拠地を文芸部室にしてキヨンが長門に言
う言葉にそっくり。そんな事はお構いなしにハルヒは

「長門有希！」

いきなり大声を出す。さつきから近所迷惑だぞ。ハルヒ

「貴方は今日から長門有希って芸名でやりなさい！その名前がいい
わ！直感したの……！」

「ながと……?」

キヨンが初めて聞いた言葉のように繰り返す。ってかそれ本名だろ

……

「SO3社最後のチャレンジか……こんな展開でいいのか?」

キヨンが長門初のCD『ノーリアクションガール』を見ながら話す。
ノーリアクションガール……性格そのものじゃねーか!

「ダメだと思う、いや絶対無理だよ、これは!」

「そつだよな」

キヨンも同意見のようだ、だが同じ様にCDを見ていた古泉は

「社長には誰もかいませんよ。前世があるならその前世にも前世がある」

社長には誰もかなわない。それは分かるが何故前世の話になる？

「天文学的確率で僕達六人が『縁』で結ばれていた可能性はあります。この星、宇宙、あるいは異次元までをも候補とするなら……ね」

「ああ、その前世と縁とやらはこの前ハルヒが話してた事だな？」

やっと分かった

「その通りです。ふふ……もし、彼女がブレイクしたら社長の言う『縁』にも説得力が出て来ますね」

「全くだ。古泉は前世でも理屈っぽい奴だったんだろっな」

「キヨンの前世はいつも通りやれやれって感じなんだろうな」

俺の前世は普通の民間人だが？

「なっ！まあそうかもしれないな」

そうかもしれないじゃなくてその通りだ、と言いたいところだが生憎そこまでバカではない

しかし俺ももちろんキヨン達はハルヒを除き、長門有希でデビューした前世は多分長門有希？があそこまでデビューする。いや、それ以上の惑星規模で売れるとは思っていなかった

一年後、前代未聞の惑星規模の人気を誇った長門有希はもはや言葉に表せない程凄まじかった

「十三時からTV収録が二本、その後はNYとパリの雑誌にインタビューを」

高層ビルの最上階、一年前には叶わないと思っていた、場所でハルヒ、キヨン、朝比奈さんと次のスケ

ジュール確認をしていた。古泉は出かけていてもはやハルヒではなく、古泉が社長のような感じだ。キヨンと俺とは違う意味で苦労し

ている

「はわわっ、アメリカ大統領が今度会談をもうけたいと……」

朝比奈さんが言う。ちよつと待て！大スターがアメリカ大統領と会谈する必要あるのか？

「素晴らしいわ有希！これこそ大スターよ！！」

「いや、大スター以上だろ」

「本当ね！外にリムジンとめておくから準備が出来たら降りてきてね！」

と言ってハルヒと朝比奈さんは外に出て行った。リムジン……未だに聞き慣れない言葉に頭を悩ませる俺。

「……………長門」

キョンが長門に質問した

「ハルヒの言う通り、今やお前は大スターだ……だが一ついまやセカイ最大の、謎となった疑問が残っている。それは……ほんとうの名前を誰も知らない。本当は何物なのか誰も知らない……」

長門有希、お前はいったい何物なんだ？」

そうなのだ。俺の知っている長門有希であれば宇宙人。涼宮ハルヒの観測者でも答えればいいが、こいつは俺の知ってる長門有希ではない

「同一時間軸上に並行して存在する世界をオプションに観測中。
ここは従属階層に属する」

いきなり長門が話し始めた。オプションナル？従属階層？なんだそりゃ

「私はスターではない。輝く存在に照らされて浮きたって見えてる
に過ぎない」

「ちょっと待て、なに言ってるんだ？」

「キヨンと同じく」

ますます分からなくなるので、一旦話を整理しようとするが、構わず話す長門

「階層の重要度が低いので放置してきた。しかし最早事態は無視できないレベルに達した。勝手な行動を許してほしい

アイドル長門有希は引退する」

「「え……」」

いきなりの発言に呆然とする俺達。そのまま長門が出ても立ちすくんだままだった。そして姿を消した

「ああもう、本当にどこ行っちゃったのかしら。おかげで貧乏事務所から再スタートだわ」

数日後、『長門有希引退』という新聞が世界に読まれてるときに俺達は昔の事務所に戻って再スタートという事になった

「お前が金を使いすぎたからだろ」

「うっさいわね岳斗、あんた達も使ってたじゃない」

「お前程使ってはいない」

俺がこの言葉を言った後、ハルヒの威圧で黙る

「なあ岳斗」

「なんだよ？キヨン」

「もしかしたらSO3社の様な場所がほかにあるかもしれない」
突拍子もない言葉を言い出すキヨン

「何でだ？」

「たまに思うんだよ、そこにはハルヒや俺やお前、似たような奴が
六人集まってて、ハルヒのもと同じような事をしてるんじゃないか
ってな」

「何だそれ？」

「俺、結構真面目に話したんだよ。なのに、そのリアクションはな
いだろう」

「バカじゃねーの？」

「なっ！お前に言われたk」でも……」……なんだ？……」

「あるかもなそんな世界は、何せ俺達は前世からの『縁』だしな」
久しぶりに真面目な意見を言ったと思った俺

「ハハッ、そうだな」

と、キヨンが言う。すると

「何やってんのキヨンと岳斗！明日のスター探しに行くわよ！」

「分かった、分かった」

ハルヒのもとへ歩きだす俺達。一番長門に質問したかった事、それはお前の正体ではなく――

長門、楽しかったか？

この言葉は、転生に成功した俺に預けたい。そんな事実はキヨンも同じ事を考えていたとは知らず、ハルヒをキヨンと共に追いかけた

「長門？」

SOS団の部室で、長門に聞こうと思っただ事を聞こうしたら、キヨンと声が重なった

「奇遇だなキヨン。実は俺、お前と同じ事を聞くような気がするんだよ」

「そりゃまた奇遇だな、俺も同んなじだ」

ホントにこれは直感だ。けっして紙の力ではない

「じゃあ一緒に言っか」

「そうするか」

そう言っつて無反応の長門に一斉に聞いた

「長門、お前は今、楽しいか？」

その質問に長門は無反応だったが、少し頷いたような気がしたのは気のせいではないだろう。そんな事を考えながら、俺は何故こんな事を、しかもキヨンと同じようなタイミングで聞いたのだろうか？疑問だ

アクセス三万越え、ユニークあと少して六千記念！パラレル番外編シンデレラ

今回は精一杯一話で終わらせるため、文章を多くしました、こんなに多くの話を一話でまとめたのは初めてです。今回のパラレル番外編とこの二次創作の主人公との違いは

・ハルヒの事を涼宮ではなく、ハルヒと呼ぶ

・紙はない

・みんな力を持っていない

の三つだと思います。では次は本編で、では！

P S

最後の方少しネタバレになってしまいました。すみません。後これ書いてる途中にユニーク六千突破！ありがとうございます！

超能力者の登場（前書き）

今回はサブタイトル通りです。

超能力者の登場

俺の前に急に次期SOS団副部長古泉一樹が車から出て来た。高校生の時と同じような笑顔で立っている

「で、何のようだい？古泉とやら？」

「ご無礼をして申し訳ありません。ですが、転校する貴方に丁度いい機会だと思ひまして。付き合ってもらえませんか？」

「見ず知らずの人間にはついていけない。これは小学生でも分かる事だ。丁重にお断りするね」

当たり前だ。普通なら逃げるのが得策なのだが、優しい俺に感謝しやがれ

「すみません、ですが事態は一刻を争う。是非とも付き合ってもらいたいのですが……」

今の俺は疲れているので遠慮しとく……と言いたいのだが、一ツ気になる部分があった

「ちょっと待て、事態は一刻を争うってどういう事だ？」

事態は一刻を争う事に俺は巻き込まれた（宇宙人の事は別として）覚えはない。ましてや涼宮に閉鎖空間を作らせるような発言をした覚えは少ししかないし、それも可能な限り抑えたのだが。どういう事だ？

「それを今から説明したいのですが……車に乗って行きましようとも言えないですし……」

当たり前だ、もしお前が急進派に変わっていて、俺が殺されたらどうするんだ？いくら神様とて、俺を二度も転生させてはくれまい

「ならば、歩きながら説明したいのですが……」

「歩きか……分かった、俺を帰させてくれそうにもないしな。付きやってやるっ」

「ありがとうございます」

そう言っただけで古泉は車の運転手に何かを告げるとすぐにこっちを向き

「では何から説明すればよろしいでしょうか？」

「じゃあまず、その原因を聞きたい」

「え？いいんですか？」

古泉は不思議そうな顔でこちらを見つめる

「何がだ？」

「私達の正体とか……こんな事してるグループはいるのか……など」

「俺にとってそんな事はどうでもいいんだ。とにかく原因を聞きた
い」

そう言うと分かりましたと古泉は言って話し始めた。どうやら超能力者達は俺が異世界人、又は不思議な人間だと気づいてないらしい。「この一刻を争う事になった原因……それは貴方、中村岳斗にあるのです」

は？俺の頭にあるハテナマークがどんどん増えていく

「どづいつ事だ？」

「隠しても貴方にはどうという事もない。涼宮ハルヒの事ですよ」

「？どづいつ事だ？涼宮は特になにもしてないぞ」

俺は出来るだけ全く分からない人の振りをするが、古泉は

「とぼけても無駄ですよ。機関の情報量をなめてもらっては困ります。貴方は既に宇宙人、未来人とコンタクトをとっている」

「お見通しってことか」

「ええ、貴方が涼宮ハルヒの干渉も受け付けられない事もね……」

はあくため息をつく、どうやら俺の思い違いだったようだ。だが宇宙人や未来人よりは俺の事を知らないらしい。

「で、本題に戻すが、俺は特に涼宮に入れ知恵もしてないぞ」

それを言うと古泉は真剣な顔になる

「その通りです。それは機関の情報からでも分かる。ですがもんだいはそこではありません」

「じゃあなんなんだよ？」

「貴方が涼宮ハルヒの元から離れようとしている事です」

え？またもや俺の頭にハテナマークがさっきの数倍程現れる

「どういうことだ？俺はさっきお前が言ったように涼宮の干渉は効かない。しかも俺は転校する事は涼宮には夏祭りの時言っつもりだぞ。だから知るはずがない」

そう言つと古泉は真剣な顔で

「本当にそうなのですか？」

え？俺は古泉の言ってる事に疑問に思つが

「当たり前だ。だからこそ転校できる涼宮の干渉が出来ないのなら、今、楽しめてるはずの涼宮が俺を転校させるはずがない」

「本当にそうなのですか？貴方の能力は涼宮ハルヒの干渉を『任意』で受け付けない効果ではないのですか？」

その言葉にはつとするが

「待ってくれ、おかしい、俺は涼宮に伝えるつもり……ッア！」

気づいた。俺はこの願い一番の短所に気づいてしまった

「そう、貴方は涼宮ハルヒにその事を伝えると意識しすぎてしまったせいで、無意識の内にその干渉遮断能力を無意識にOFFにしてみましたよ」

そこで、古泉が止まる。どうやら目的の場所についたらしいが、やつの事で一刻を争う事態の意味が分かった

『涼宮ハルヒが世界を変えてしまつかもれない』という可能性がある事を――

閉鎖空間と世界の危機

一旦止まった古泉とは違う意味で止まった俺を見て古泉は言った

「大丈夫ですか？」

「ああ、ちよっとびっくりしてな」

こんな早く原作の崩壊……いや、世界の危機が始まっているとはな……俺は高校生の時かそんな時に起きると思っていた。予想を遥かに越えたな、ちくしょう！

「なら心配はなさそうですね。いきなりですが目を瞑ってもらってもよろしいでしょうか？」

「はあ？」

戸惑いながらも目を瞑る。何故だ、とてつもなく嫌な予感がする。その後古泉に手を繋がれた。え？何なんだよこれは！

俺はこれが閉鎖空間への切符という事を忘れていながらも、そんな事を思った

「もう大丈夫です」

その古泉の声で俺は目を開ける。するとそこには……

「何だ？」

この夜と夕方が合わさったような薄暗い空間。そしてさっきまでうるさかったバイクや人の声が全く聞こえない。ただ俺と古泉が立っているだけだった

「ここは？」

できるだけ俺にもっと関心をもたれぬよう知らない振りをした

「知らないのですか？」

そう言ってこちらを向く

「人生知らなくても良いことなどたくさんある。その一つがこの変

な空間だと思うが？」

人間として全うな意見を述べる俺

「では説明しましょう。ここは次元断層の隙間。我々の世界とは隔絶された閉鎖空間です。僕の持つ超能力の一つがこの空間に侵入する事……」

あっさり超能力とか言いやがった。俺が超能力者の存在を知っている事は機関が知っているのだろう

「今回はここが壁ですね。半径およそ十キロメートル。ドーム状の空間を想像してください。通常物理的な手段では侵入不可能。」

閉鎖空間の壁を触りながら言う古泉とそれを聞きながら触る俺。壁は寒天のように柔らかい。

「詳細は不明ですが、ただ一つ分かってる事があります。それは涼宮さんが不機嫌になると発動するという点です」

この時点で結構知ってるんだな。逆に言えば全く高校生になっても進歩しないということなのだが

「それで、今の涼宮はどんな状況何だ？」

「かなりの不機嫌さです。今日は貴方との不思議探索とやらもないので何時もより大きいですね」

「そうか……」

あいつ結構俺にいちやもんたてといて楽しんでいたんだな。良かったと言っべきか？

その後、お互い何も話さずに近くの公園まで行った。薄暗い公園はある意味夜の公園より不気味だな

「始まりますか……」

その言葉が俺は一瞬では神人という名の怪物^{ストレス}が出てくるとは考えられなかった。と、次の瞬間

ドガン

その大きな音で。俺達はその方向を向くるとそこには

「神人……」

この言葉は決して俺の言葉ではない。古泉の言葉だ。

「涼宮さんのイライラを具現化したものです。これが閉鎖空間ではなかったら大惨事ですが……ストレスは自分の作った閉鎖空間でのみ発散……彼女もなかなか理性的です」

「何が理性的だ……これじゃ裏の世界で破壊つくす魔王そのものじやねえか」

「では世界の危機について少し説明します」

そう言ってさっきから見ていた神人から目を離し俺を見る

「いいですか？ここ最近閉鎖空間は落ち着いていました。貴方のおかげです。しかし同時に貴方によって世界が崩壊しつつある！」

一気に口調を強める古泉

「私としては涼宮さんと貴方は同じ学校にいても構わない。それは機関の意見そのものです。しかし最早それは私達には止められませんが。そこで貴方をお願い……とは違いますね、貴方の義務です。それは……」

貴方が世界の崩壊を止める」

静かにそして強く古泉は言った。そしていつもの笑顔に戻り

「そろそろ行かなければ。神人をあのままにしておく、神人によって閉鎖空間が拡大して世界を飲み込んでしまうんです。今僕の仲間が戦っています。そうはさせないために……」

そう言うと古泉の周りに風が吹き始め赤い光を放つ玉ができその中に入り浮かび上がる。そして神人のもとへ向かう。

しばらくして超能力者VS神人の戦いは超能力者の勝利に終わる。

そして古泉が戻ってきた

「失礼、終わりました。さて見ものですよ」

そう言って古泉が指差した灰色の空を見る。その空間が割れて……

もとの晴れた空に戻った。

「やれやれ」

そう言いながらもとの晴れた空に向かって呟いた

「どつやら俺がやらなければいけないらしいな」

このままでは世界が終わる――

覚悟は出来た

夏祭り

終始笑顔だった古泉と別れて数十分、涼宮から電話がかかって来た

『あ！岳斗？明日の夏祭りは四時半集合よ！遅れたら罰金。お金もちゃんと持って来てね！じゃ！』

と行って電話を切った。な……なんて野郎だ。俺はまだ名乗ってもないのに……明日サボって野郎か……？しかしそうしたら世界の崩壊があるし仕方ねえか

そう言っただけケータイを閉じた。家ではもう引越しの準備は始まっている

「早いじゃない岳斗。何か変な飲み物飲んだの？」

最後ぐらいは早く来ようと涼宮より早く駅前に来ようとしたらいきなり変な飲み物飲んだの？はないだろ

「特にそんな物騒な飲み物は飲んでいない。今日早く来たのはたまさま」

「そうなの？まあいいわ。早く行きましょ！夏祭りは早い者勝ちよ！」

何をどうしたら早い者勝ちに夏祭りはなるんだ？と、突っ込みたかったが、そんな事を涼宮に言う程バカじゃないんでね

今日ある夏祭りは駅前周辺の大規模の夏祭り。なので色々な屋店が集まっている

「ちょっと岳斗。これを見て」

「何だ？」

そう言っつて涼宮の持つ紙を見る。するとそこには……

「駅前周辺の屋台パンフレット？何だよこれ？」

「題名見てわからないの？仕方ないわね。これは私が朝に用意されてる屋台全てを見て調べた名付けて屋台早見表よ！」

じゃあ目次も屋台早見表と書け

しかし行動だけは涼宮だな朝からご苦労なこった

「さあまず射的いくわよ！ついて来なさい！」

「りょーかい」

俺はそう言つて次期SOS団団長は俺を強制的に連れ回していかされた

射的

「ちょっとアンタ！ちゃんと狙ってる？」

「狙ってるんだが……中々当たらん」

俺は残り少なくなった球を詰めて当てようとしてチヨコールに狙いを定めようとする

「貸して見なさい！」

「おい、俺のを奪うな！」

とつくのとうに全てを撃ち終わって色々な物を取った涼宮は俺のゆつくりさに我慢出来なかったのであるう。でもこれが普通の射的ですよ？

「いい？これをこうやって……そして狙いを定めて撃つ！」

そう言った瞬間に一つの球が俺の狙ったチヨコールとは違う、ちよつと大きいパズルを落とした

「はいゲット」

そう言つて涼宮は自慢気にパズルを見せる

「おい！それは俺の球が取った奴だぞ！それをください！」

「何言つてるの？当てたのは私よ？これは私の物。どうせあんたはチヨコールぐらいしか落とせないと思うけど」

「テンメエ……はぁ……」

どうやら現実はそう上手くいかないらしい……俺に幸運を

型抜き

「あーちくしょう！何で俺のはいつも崩れる！」

「はいおじさん。これでいい？」

俺は中々抜けない型抜きにイラつき涼宮は何度も完成した型抜きをおじさんに渡し、その形の分のお金をもらう涼宮

「アンタホントに才能ないわね」

「俺は個性がないという個性を持つてるからいいんだよ」

個性がないのは今時珍しいんだよ！

「ハアー全くしょうがないわね。ちょっとコツ教えてあげるから」

と言ってコツを教えてくれる涼宮。その通りに形を抜いて行く……

「よし！出来た！」

傘の形をした形を抜けた！

「私のおかげよ。感謝しなさい」

「どうもです。涼宮先生」

「はいよ、200円」

だがおじさんがくれた200円は俺の型抜きで使ったお金の5分の1にもならなかった

「さあ次行くわよ！」

そんな事は気にせず次へ行く涼宮は何故か急いでるように見えた

かき氷

「やっぱり夏と言えばこれよね！」

「おい、俺の金使つといてそりゃないだろ！」

かき氷屋で俺はブルーハワイを涼宮はストロベリーを頼んだ（払ったのは俺だが）

「あーキーンと来る！」

「そんな急いで食べるからだ」

涼宮が頭を抱えて唸る

「うっ……うっさいわね！私は早く食べたいから食べてるだけよ！」

今日の涼宮はおかしい。何故か焦っている。何故？その時、古泉の一言を思い出した

貴方は無意識の内に涼宮さんの能力を遮断する能力を無意識的にOFFにしていたんじゃないですか？

確かこんな一言だった。そうか、涼宮は無意識下で俺が何処かへ行ってしまふ事を分かっているのか！それなら話は早いな

「涼宮」

「何よ？」

真剣な顔つきにして涼宮に言った

「俺、転校する事になった」

言い終わった後、涼宮はただ俺の顔を見ていた

夏祭り（後書き）

予定が大幅にずれてしまつて中学生編から抜け出すのは結構後になつてしまいました。すみません

また会う日まで・・・(前書き)

更新遅れてすいません！

構成は考えたんですけどなかなか会話がまとまんなかったりして更新が遅れてしまいました。やっぱり小説書くのは難しい

また会う日まで・・・

「そう」

あれ？素っ気ないな

俺が転校する事を告白した数十秒後、長門みたいな単調で涼宮は言った

「もつと何かねえのか？ホント！？とか」

俺の言った言葉を無視して涼宮は

「ホントは岳斗が何処かに行くような気がしてたのよ。宇宙人へのメッセージを描いたときに会ってからね、まあ勘だけど。私の勘ってよく当たるのよ。自分でも驚くぐらいにね。最近だけだけど」

「そうなの？」

口ではそう言ったが、やはりそれを感じるのも一つの力なのかね。と、思う

「そんな事はどうでもいいのよ。私が聞きたいの是一件だけ」

「いやに涼宮らしくないな」

「まあ……そうね。こんな事言つのは私らしくないかも知れないわね」

少なくともないかも、じゃないと思っぜ

「で、聞きたい事とは？」

「じゃあ言うわ岳斗は……」

私といて楽しかった？」

俺はその言葉を言った涼宮に言葉を失った。いや、驚いた、と言った方がいいのかもしれない

「お前、ホントに涼宮か？」

「何よそれ？ええ、涼宮ハルヒよ」

「そうか……」

涼宮は真面目に聞いてきている。そうじゃなきゃ相手の事を聞く事など俺の知った所じゃないからな。まあ俺の解釈だが。

「で、岳斗はどうだったの？楽しかった？楽しくなかった？」

「当たり前だろ？俺は……」

そんな答え。出会った時から決まっているさ

「楽しかったさ。そりやお前に振り回されたり散々な事も度々あったが、ああ、楽しかったさ」

その答えに涼宮は一呼吸おいて

「そう……まっ！私と不思議探したり、ジョン・スミスを探すのが楽しくなかったなんて有り得ないしね！」

と、言った時にはいつもの涼宮に戻っていた

「おいおい、ずいぶん自信過剰な発言だな」

「当たり前じゃない！私と不思議探する事の何処が楽しくないのよ！」

これでこそ、俺の知ってる涼宮ハルヒだ

「そうだな。ああ楽しかったぜ涼宮」

「よし！そうと決めればまだ夏祭りは始まったばかり！遊ぶわよ！」

何が決まったんだよ……

「さあ、さっさと行く！」

「りょーかい」

その後も散々連れ回されて色々と涼宮と夏祭りを楽しんだ

「じゃあな、涼宮」

「ええ、あつそうだ！」

帰り道、別れを告げる時、涼宮が何か忘れ物をした人みたいな大声を出した

「どうしたんだよ？忘れ物か？」

「違う違う、忘れそうになっただけよ」

「忘れそうになっただけ？どついう事だよ？」
よく分からんぞ

「コホン、貴方をSOS団記念すべき第一号に任命します！」

一瞬、何を言ってるのか分からなかった

「SOS団って?」

「そうね。まずそこから『世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団』略してSOS団よ!」

知ってるけども!いや、色々とおかしい。涼宮がSOS団を作るのは高校生の時だし、それもキヨンの助言の上で成り立った団だ。この中学一年生の時期に作られるのはおかしい

「だから岳斗!高校は絶対に北高に入りなさい!団長命令よ!」

「北高?何故俺がそこに行かなきゃ「わ・か・っ・た?」了解」

まあ行くつもりだったんだがな

「じゃあまた会いましょう!またね!岳斗!」

「ああ、じゃあなハルヒ」

今日わかった事は二つ

俺に夏祭りは不向きであり涼宮よりハルヒの方が呼びやすいって事だな。有意義な一日だった。少なくとも学校で勉強する時間よりな。

そんな事を思いつつ、いつもより軽い足どりで家に帰った

また会う日まで・・・(後書き)

これは最終話じゃないですよ！

もう一人の異世界人と交渉（前書き）

今回は旅行中に書いたので駄文をお許しください

もう一人の異世界人と交渉

ハルヒと離れて自分の家に向かう途中、どこからともなく声がした
「何だ？」

そう俺が言つと、暗闇でよく見えないが俺と同じくらいの歳だと思
われる人が話しかけて来た

「こんばんは」

暗闇でよく見えないがそんな声が聞こえる。言い方からして女子な
んだろう

「誰だお前は？姿を見せるよ」

その声は明らかに自分の知り合いではない

「ああ、ゴメンゴメン見えなかった様だね。中村岳斗君」

自分の名前を言われた事で少しびっくりする俺

「テメエ……………何者だ？」

「だから今、顔を見せるって」

そう言つて出てきた少女は茶髪のショートカットで、ピンクの服を
着た可愛らしい少女だった。だが、今そんな事はどうでもいい

「お前はなんだ？宇宙人か？超能力者か？未来人か？」

「超能力者。表向きは」

超能力者という事はいいが次の表向きという言葉に気を付ける俺。いや、誰だって気にするだろう

「表向き？どう言う事だ？」

「まあ待つてよ。順序があるからさ。私の名前は天海響あまみひびきまあさつき言ったように表向きは超能力者。勿論機関に所属しているよ」

「分かった。で？お前は何者なんだ？そして、表向きやらの理由は？」

「せっかちなだね。まあ落ち着きなよ」

その言葉でちよつと俺は落ち着く

「で、表向きの超能力者とやら？改めて聞く。お前は何者なんだ？」

「私も君と同じ。だよ」

君と同じ？という事は俺と同じって事か。ますます分からないぞと、頭をひねっていると天海はため息をつきながら

「分からないの？意外と鈍感さんなんだね」

「悪かったな」

「じゃあ大大ヒント。私は未来人でもないし、超能力者ではあるけど、宇宙人でもないよ」

俺と同じで未来人でも超能力者ではあるが宇宙人でもない……まさか！

考えた末、一つの結果に辿り着く

「まさかお前……」

異世界人か？」

そう言うと、天海は頷き

「そう、その通り。まあ君とはまた違う世界から来た人間なんだけどね。まあ話せば長くなると思う。今、誰にも監視はされていない。そこら辺のファミレスにでもどう？」

「そうするか。いいぜ」

何故監視されたのが分かったのか分からないままファミレスに移動した

ファミレスに到着して俺はコーラを頼み、天海は紅茶を頼んだ

「さあ話してくれ、俺は今日、夏祭りやら何やらで忙しかったから早く帰りたいんだ」

「だから落ち着いてって。じゃあまず、私の異世界転生までの話。私の世界は貴方の世界はどうだか知らないけども世界を巻き込んだ戦争が何年も続いていた。そして、母は私をストレス発散と言う言い訳で殴られたり蹴られたりして最後は……」

「話は分かった。話を聞いてるこっちまで悲しい気持ちになる。なんか………スマン！」

「大丈夫。それで、私は本当なら記憶を消されるで、転生されてる筈の私に神様と言う光の球が現れたの。それで、本当ならちゃんと前向きに生きてるはずの君が母と言うイレギュラーの存在によって後ろ向きになって、最後には母に殺されてしまった。こんな事は普通ない筈なんだ。と言って私をランダムに転生してくれたんだ。記憶と三枚の願いを叶える紙を渡されたんだ」

聞いてて、俺はまた暗い気持ちになった。本当なら前向きに生きて

るはずの天海は母のせいで死んでしまった……前世で普通に何もしてなかった俺とは違う。何故か悔やんでしまう。だがその気持ちを抑えて聞いた

「で、俺になんのようなんだ？」

「待つて、今から話すから。五年生の時記憶を取り戻した私は涼宮ハルヒの世界って言うても、聞いたりテレビ欄で見てちよつと興味が湧いて一巻だけ読んでそこで終わりだったから何も分からなかった。だけど有る日、眠ってる途中で神様の声が聞こえたんだよ。お前と同じ異世界人中村岳斗に会って。だけどその中村岳斗って人が分からなくてそのまま一年が過ぎ、ある事に気づいた」

「紙の事か？」

「うん。運良く一巻の記憶が残っていた私は宇宙人や未来人になるよりも一番なりやすそうな超能力者を選んで中村岳斗に会おうと決めたんだ」

無言で頷く俺

「そして、一年後。その間にもう一枚紙を使い宇宙人のあの……朝倉さん達宇宙人が使ってた情報改変を自分でも出来るようにした。そして、超能力者の力に目覚めた私は機関に連れてかれてそのまま神人退治に任命されて無事古泉君とも会い、古泉君から中村岳斗さんとコンタクトが取れましたと言われて、もう一つの願いを使い、誰にも見られたくないと思った時は誰にも見られなくなる、という能力を使って情報改変の効かない貴方にやっと会えたわけなんだよ」

「お待たせしました」

丁度タイミング良く出された飲み物。俺は飲めないまま、天海は砂糖を紅茶に入れてスプーンで回す

「で、何で俺が情報改変を受け付けられない人間になったと分かった？」

「世界中のテレビは存在しないという情報改変をしても中村君のテレビは健在してましたから」

「待て、そんな事やったのか」

「中村君とのコンタクトが取れた後、五分間、確認のために結果は機関に調査してもらいました」

手段を選ばない奴だと思いつつ、俺はコーラを飲む

「それで、中村君はキョン君とやらの学校に行くんだよね」

「ああ、そうだ」

「私もその学校に通っているだよ」

「……………何が言いたい」

「ギブアンドテイクで行かない？私が涼宮ハルヒさんの情報など聞きたい事を機関で調べて、中村君に報告。中村君も同じく私に原作など情報を伝えるようにする。勿論邪魔などしたりこの事を話したりしないよ。私は穏便派なので、古泉君と一緒になんでね」

「……………」

確かにそれだと佐々木の入る塾にいつ頃佐々木が入るのか分かるし、ハルヒの精神的な面も分かる。俺にいやな面はない。しかし、初めて会った人だ。そう簡単に信用できない。ならば……

「分かった。だけど初めて会ったばかりじゃ信用できない。俺が転校して一ヶ月様子を見る。それで信用できたら交渉成立といくのはどうだ？」

それに少し考えて天海は頷き

「分かった。いいよ岳斗君。これからよろしく」

「ああ、よろしく。天海……じゃ呼びにくいから響でいいか？」

涼宮っていうより言い難い

「いいよ」

「じゃあよろしくな響」

「うん。改めてよろしく」

その時、急に響が

「ヤバイ！もう十一時！じゃあね！」

と言ってダッシュで帰って行った。違う異世界人か。いるとは思わなかった。と、思いつつテーブルを見ると

「……………」

伝票を残して帰って行ったのに気づいた

もう一人の宇宙人（前書き）

どうも、お久しぶりです。カッシーです。

まず、更新遅れてすみません！書こうと何度も思ったのですが書こうとすると内容は浮かんで来るんですけど会話がでてこなかったりで一ヶ月以上遅れてしまいました。すみません！

しかも出来たのが短くてこんな駄文。どうかそんな小説でも見て下さると嬉しいです。あと、是非感想などもお待ちしてます！

もう一人の宇宙人

「……………」

沈黙

「……………」

この沈黙も実際五分程度なのだが、もう俺には一時間以上に感じられる一体こんな沈黙が何分続くのか出来るだけ速く終わらせてもらいたい限りだ

ただいま殺風景すぎる部屋。長門有希さんのお宅に訪問中だ。何故かと言うと、一時間前に遡るのだが聞いてもらいたい

あの異世界人と出会った翌日、最悪のモチベーションで起きた俺には、もう一つやり残した事を実行せねばならないという気持ちがある。頭の中をグルグルと回転していた

「長門に会う」

本当はもっと早く会わなければいけなかったのだが、何処ぞの自己中野郎の事など、色々な事があり、長門の事を考えていなかった。

そこまで考えがなかったという表現の方が正しいのかもしれない

まあとにかく長門の家は確か光陽園駅前の建物だったはずだ。あの公園はハルヒと何度か行ったことが有るので覚えている。

ただあそこは住宅街であり、マンションが多い、どうやって探せばいいのだろうか、まあまずは光陽園駅前の公園に行った方がいいのだろう。

そう思った俺は重い腰を上げた後、パンを頬張った後、すぐさま外へ出て、光陽園駅前に向かった。

「ふう……」

十分後、公園のベンチがあるところに来た。理由は、ここは長門がキヨンを呼んだ集合場所であるため、ここが一番可能性が確かだったためだ。そこを見回すとある一人の少女を見つけた。

否、見つけてしまった

そこで某前と立ち尽くしていたため見つけてしまったらしく、此方に近寄って来る。

間違いない、こいつは……

「こんにちは岳斗君。長門さんに言われて迎えに来たの。ああ、紹介が遅れたわね私の名前は朝倉涼子。長門さんの友達よ。よろしく」

笑顔で近寄ってたきたのは宇宙人、朝倉涼子
だった。

長門有希の質問（前書き）

余りにもすくなすぎたので早めに更新しました。これも同じく短いとは思いますが、来週中間なので……終わったら続きを書きますのでよろしくお願いします！

長門有希の質問

俺の前に急に現れた宇宙人朝倉涼子。

キョンを殺そうとした人物でもある宇宙人。

そんな奴が俺の前にいた。今、紙を出す時間はない。どうする。俺無意識に拳を握り締める

「長門さんが家で待ってるから行きましょ。あ、大丈夫。私はついていけないから」

「ちょっと待て！」

「何？」

「その前に質問したい事がある」
拳を緩めて聞く

「どうして俺が今日ここに来るのが分かった」

そう言うと。少し笑いながら

「分からないの？簡単よ。毎日ここに来てただけ」

「……毎日か？」

「ええ。別に少しだったし気にしてないわよ。長門さんの家には私
が連れて行くからついて来て」

「……」

半信半疑だったのだがこのままここにいてもしょうがなかったので、
歩き始める朝倉について行った

「1111」

住宅街にある高級感溢れる家に到着した。そこからエレベーターに

乗り暫く歩いていると、長門と書かれた表札の前で朝倉が止まる。

「じゃあ私はここでお別れ。あと、長門さんは無口だから、出来るだけ気を遣ってね。じゃ！後はよろしく」

そう言うつとエレベーターの方角に歩き始めた。

俺の視界から消えた瞬間ホツとした。いつ殺されるか分からないから恐怖を感じない訳がない。一応安全に着けたので。ひとまずホツとする

そのあと、インターホンを押す。すると、数十秒間後、

「……入って」

と言ったあと、ガチャとドアが開いて高校制服姿の長門が現れた。メガネなしで

「あ……えつと……お邪魔します」

そう言うつてから、長門はテーブル以外何も無い部屋に招待した

「トーン」

「飲んで」

「どつも」

お茶を差し出されたので、それをちよつとだけ飲む

で、最初のシーンに戻る訳だ。これだけ会話がないとなんか変だわ
仕方がなかったので、俺から話を持ち込んだ。

「で、話つてのは？」

そう言うと長門は俺を無表情で見ながら

「まず、貴方に聞きたい事がある」

「なんだ？」

そついいながら冷めて来たお茶をいつきに飲み干す

「貴方は実際、どこまで知ってる？」

「………どういう事だ？」

「私達、情報統合思念体について」

これまたいきなり聞いて来た

「さあ？情報統合思念体ってなんだ？難しい名前だな」

出来るだけとぼけようとする俺、まあ実際、情報統合思念体の事な
んてほぼ知らないんだけどな。

「では質問を変える。貴方はどこまで知っている？」

「何をだ？」

「これから起きる事」

これまた直球ストレート。質問にどう答えればいいか迷う。やはりとぼけるのが一番か

「これから起きる事なんてしらねえよ。俺は未来人でもなんでもないしな」

「じゃあ一体貴方は何者？」

「は？どういう事だ」

「中村岳斗。貴方は既に超能力者古泉一樹。未来人朝比奈みくる。そして私達情報統合思念体。更には涼宮ハルヒとのコンタクトをとっている。こんな事が普遍的なヒトが出来る行為ではない」

「……………」

今までで一番答えにくい質問だ。どうやってごまかす。いや、誤魔化してもバレる。どうすりゃいい！こうなったら…………

「おれは…………普通の人間だよ。そりゃ、おれはハルヒとコミュニケーションをとったのがおかしいかもしれない。だけど、偶然ってのもあるんだぜ？」

「ぐう…………ぜん」

「ああ、そうだ。いつか、もう一人お前の前に偶然にも現れる。と、俺は思うぜ」

そう言つと俺は帰る仕度を始めた。つて言つてもカバンを背負うだけだが

「お茶、ありがとな。結構美味かつた。また来た時ついでくれ」

そう言つて返事をまたずに外を出ようとすると

「分かつた……」

「何がだ？」

長門の方を向く。

「また来た時は茶を用意する」

「……………」

驚いた。無表情のままだが、長門がこんな事を言つとは思つてなかつた。

「ああよろしくな」

そう言つてドアを閉める。なんだかんだで終わってしまったのだが、きつと信じてくれたんだろう。

「またな。長門」

ドアに向かつて眩きエレベーターまで急いだ。

明日は引越した

長門有希の質問（後書き）

感想よろしくお願いします！

キャラ紹介（前書き）

今回は迷いに迷ったところで、キャラ紹介する事にしました。

次話を楽しみにしてた方すみません。次は普通に更新します。

今までの話を読んだらこれを読む事をお勧めします

キャラ紹介

なかむらがくと
中村岳斗

年齢 / 12 (現時点)

趣味 / 音楽を聞く事

能力 / 涼宮ハルヒから貰った能力

涼宮ハルヒの情報干渉を無効化できる。もちろん、無効化しない事も可能。

三つの紙から貰った能力
情報変換を無効化する事ができる。上と同じく、無効化しない事も可能。

残り二つは未定

誕生日 / 12月15日

外見 / 髪は黒髪で、ちょっと髪が長い。普通よりまあまあ上のスタイルと顔立ちを持つ。

詳細 / 異世界人。本来、生きてたはずなのだが、神様のミスにより、信号無視の車に轢か

れ死亡。お詫びに三つの紙をもらって涼宮ハルヒの世界に転生される。小学生の頃、記憶

を取り戻し、東中に行く事を決意し、涼宮ハルヒとも打ち解けていたのだが、未来人、超能力者などにより、キヨンのいる中学に転校する。

イメージCV / 岡本信彦

青の被魔術・奥村燐

とある魔術の禁書目録・一方通行、など

工藤祐介
くさくさいゆうすけ

年齢 / 12 (宇宙人だったので、本当の年は知らない)

趣味 / 外で遊ぶ

外見 / 美少年。ピンクのかかった髪。スタイルは普通で顔立ちは上
詳細 / 本当は対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイス。小学生の頃から涼宮ハルヒを監視していた。朝倉涼子と同じく急進派だったので、現在の「鍵」中村岳斗を襲ったが間一髪のところ、長門が来たため、戦ったあと、消滅した

イメージCV / 井上麻里奈

焼きたてジャパン!!・冠茂

S K E T D A N C E ・ 吉備津百香、など

あまみひびき
天海響

年齢 / 12 (現時点)

趣味 / 菓子作り

能力 / 三つの紙の効果で、古泉一樹と同様、超能力者になった。長門と同様、情報改変が使える。そして、誰にも見られたくないと思ふ事で許可した人間以外、見られたりしない能力を手にした。という訳で三つの紙は全部使っている

しかし中村岳斗の努力で異世界人そのものに能力を涼宮ハルヒは与えたため、情報干渉を無効化する事が可能になった

外見 / 茶髪で、ショートカットにしている。かっこいいと可愛いの両方を持ち合わせてい

るが、可愛いというイメージの方が大きいスタイルは上、顔立ちは中の上

詳細 / 異世界人兼超能力者。前述の通り、紙の効果により超能力者として覚醒し、機関に属している。中村岳斗とは別の世界から転生してきた。天海響の世界は全世界で戦争が起こっており、普通に生活はしていたものの、母親の虐待により、苦しくなって自殺。もともと、この世界では前向きに生きてるはずだった。それが母親の異

変により、人生が変わってしまったため、転生された。本来なら人生が少し変わったくらいではそのまま、生まれ変わるのだが、今回は生と死を変える出来事だったので転生された。今回のようなケースはあまりないらしい。涼宮ハルヒシリーズは一冊しか読んだ事になかったため、最初は生き方さえ、迷っていたのだが、神様の助言により、中村岳斗に会う事を決意した。これからどうするのかは謎に包まれている。

イメージCV / 竹達彩奈

けいおん！・中野梓

俺の妹がこんなに可愛い訳がない・高坂桐乃、など

ここからは原作キャラクター

涼宮ハルヒ

詳細 / 都合のいいように環境を変える力を持つ少女。中村岳斗をいのように使った。おかげで、中村岳斗の財布は底をついている。

原作との現在の相違点

原作より中村岳斗にあった事で少しおとなしくなったかもしれない

キョン

詳細 / 原作での主人公であり、語り手。今のところ主人公との接点は落とし物のキーホルダーを探してもらった事ぐらい。中村岳斗は三年後のキョンにも会っている

原作との現在の相違点
特に無し。

長門有希

詳細／対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェースであり、いわゆる宇宙人。中村岳斗は長門に命を救われた事がある。ちなみに現在は臨時の時以外、待機中

原作との現在の相違点

長門は初期から眼鏡をかけていない。

古泉一樹

詳細／超能力者。いつも爽やかスマイル。中村岳斗に警告した人物であり、天海響と同時期に超能力に目覚めた

原作との現在の相違点

現在、特に無し

朝比奈みくる

詳細／ちよつと天然のところがあり、キヨンのオアシス。現在、中村岳斗が会ったのは朝比奈みくるのもうちよつと後、朝比奈みくる（大）としか会っていない。たくさんのヒントを中村岳斗に授けた

原作との現在の相違点

現在、特になし

キャラ紹介（後書き）

感想などよろしく願いします！

疑問点なども待ってます

予想以上

「引越し出来ない？」

「そうなんだ。会社の事情でな、ここにとどまる事になった」

長門の話から家に帰って数時間後、突然の事だった。父さんが帰ってきていきなり話し始めたのだ

「けど、どうすんだ？俺もここにとどまる事になるのか？」

「それは大丈夫、その学校区域に私の知り合いがいるのよ、事情を話してそこにあなただけは住む事になったわ」

横からいち早く電話で引越しがなくなった事を知っていた母さんが口を挟む

「ちよつ待て！いきなりそれはないだろ。大体、そういう事は前もって話すだろ！」

「スマン。会社が急に決めんだ」

「私と岳斗だけで、家に住むのも居心地悪いし、知り合いの家に二人で住むのも悪いから私はここに残る事にしたわ」

「ハア……了解」

まさかこんな事になるとは……朝比奈さん（大）も言ってなかったし、まだ高校に行くまでなにかあるかってのか？だとしたら無いと

願いたいね。そうでもしなきゃ俺の脳味噌を休ませられない。ここ数日に色々ありすぎたんでな

その後、俺の荷物の事などどうするか聞いた後、自分の部屋の戻ってベッドに横たわる。

聞いたところ、その知り合いの家に行くのは明日らしい。買った家もすぐ売る事になった。

正直言って、引越しが中止になった事はどうでもいい。俺が気になる事は、これがななに繋がって行くのが気になるのだ。

どんな些細な事でもとても大きな事件に繋がって行く事例がこの世界には多すぎる

「　　」

と、そんなとき、携帯の着信音が鳴り出した。疑問に思いながら携帯を手にとって電話に出る

『夜遅くすみません。古泉です』

「……………どうして、俺の携帯の電話番号を知ってるんだ」

『そんな些細な事、機関が調べれば直ぐに分かりますよ』

そうだったな

「で、なにかようか？」

『ええ、実は貴方のお父さんの転勤の事、なんですけど……』

「それがどうした？」

『実はですね、その会社と関係している人が一人、機関に所属しているんです』

「……何が言いたい」

『ここからはその関係している人に変わります。ちなみにその少女は超能力者です』

そういうと。電話の奥で二人の声が聞こえたまま、しばらく、と言っても10秒程だが、その二人目の声の主が変わった

「やあ」

「やっぱりお前か……」

天海響

「ああ、覚えててくれて光栄だよ」

「そりゃどうも。じゃあお前、本当は父さんの会社の知り合いでもなんでも無いという事か」

『ああ、情報改変でね』

そりゃどうもな話だ

「それで、俺になにかよるか？」

『一つだけだけど、君のお母さんからなにか聞いた？』

「いや、特に何も無いが」

『そう。じゃあ言うよ。機関が調べた居候先の家について調べただけど、一人、面白い人がいてね』

「面白い人？」

『うん。あだ名しか知ってなかったから写真で分かったんだけどさ』

あだ名で写真でしか分からない？

「……まさか」

「そう、そのまさかだよ。その人の名前は――」

翌朝、俺は居候先の前に立っていた。

昨日、その告げられた衝撃的な人物は、俺のこれからの予定を狂わすのに充分と言っても過言でもない人物。

「ハア……………」

まさか母さんがそんな人のお母さんの友達だったとはな

ピンポーン

インターホンを押して数秒後、ドアが開いた。その先にいた人物は

……………

「……………お前！」

「その反応を見た限り、キーホルダーの事、覚えてたみたいだな」

――原作の主人公

「久しぶり。いや、あんな数十分だし初めましての方がいいの？
まあいいや、

久しぶりだな。キヨン」

予想以上(後書き)

感想などよろしくです

謎の目論見(前書き)

後書きにアンケートがあります。協力してくれると嬉しいです！

今回何度見ても、文章が短い……orz

謎の目論見

「ここが、お前の部屋だ。狭いと思うが我慢してくれ」

「充分だよ。サンキューキヨン」

キヨンは数十秒、なにが起こったか分からないような顔していたが、状況を理解したのか普通の顔に戻り、まだ少し埃っぽい部屋に案内した。

「しかし、お前の母さんと俺の母さんが学生時代からの友達だったとはな。びっくりしたぜ」

「ああ、俺も驚きだ。それにしても俺の事を覚えてくれてるとは、それほどキーホルダーが見つかったのが嬉しかったのか？」

「そういうわけじゃない。あんな事をした奴の顔を忘れるほど俺も馬鹿じゃないんでね」

「それもそうか」

まあキーホルダーを探してる奴を手助けする奴なんて余程正義感がある奴かなにか理由がある奴しかいないだろうな。もちろん俺は後者に属する。キヨンじゃなかったら見て終わりだろう

「あいにく両親と妹が出かけていてな。まだ帰ってきてないんだ。そろそろ帰ってくると思うが……」

「りょーかい。それまでこの部屋でゆったりしてる」

「頼む。俺はまだ、夏休みの宿題が終わってないんだ用がある時は呼んでくれ」

そう言うと、ドアを閉めて自分の部屋に戻って行った。俺には頑張ってくれ。と他人事のように言うしかないな。残念ながら助ける気は全くにもってない

「しかし響は突然こんな家に呼びやがって……」

まあ、この家にいるのは結論から言うと響の企みである。いや、策略と言ったほうが正しいのだろうか。まあともかく、その話をするには昨日の電話の続きを話さなければならぬ。

『キヨン』

電話の主。天海響はそう言った

「な……お前、俺に面倒事を増やそうとしてるだけだろう」

『そういう訳じゃないよ。そっちの方が君としてもやりやすいと思
って』

「という事はお前キヨンの母さんと俺の母さんの関係は……」

『うん。私がつくった』

「そうかい。ってかお前さっき、機関で調べたとか言ってなかった
か？」

あきらかに矛盾してると言おうとした矢先、

『最初は隠そうと思ってたけど、後から別に隠す事じゃないってお
もったから』

そうですかい

『じゃあもう電話しないと思うけど、新学期はよろしく』

そう言つて一方的に電話を切りやがった。くそつたれ。情報改変は行つた後じゃ回避出来ねえよ。せめて言つてからやりやがれ、と言つてやりたかつたが、あいつらの電話番号しらねえし、もし出来たとしてもでねえだろうな。しかしあいつの目論見はなんなのだろうか。これ以上面倒事は起きないでほしいのだが

「はあ………」

ため息をついて、携帯をベッドに置くと、急に眠気が襲つてきたので寝てしまった

こんな感じだ。あいつがなにをやりたいのか未だに疑問だが、俺は俺、響は響だ。今はあいつが面倒事を起こさないようにと今一度願おう

「そう言えば、まだ夏休みだったな」

色々ありすぎて、もう一年経ったような気がする。それに俺はまだ一年生だし。原作関与はまだまだ先か……やりたい事を全部やり遂げた達成感が数日前にはまだ感じていたのだが俺はまだまだ、やらなきゃいけない事があるような気がする。

「……やれやれ」

今まであった事が序の口だと考えると虚しささえ感じてしまうな。

お願いだから響や工藤のような知らない奴が出てくるような事は起こさないでくれ、少なくとも今から三年は。

そう思いながら俺は意識を深い闇に沈めていった

謎の目論見（後書き）

響との会話が短いせいで、文章が短くなってしまいました。すみません！

では、アンケートです

実はヒロインが必要なのか必要じゃないか考えてもなかなか決まらなくて。どうにかしようにもどうにか出来ないの、ここは皆さんに決めてもらいたいなど。

出来れば参考程度ですが、ヒロインが誰かも考えて下さると嬉しいです。ホントに参考程度ですが。

期限はとくにないですが、出来れば主人公の高校入学までをお願いします。では！

もう一人の「俺」(前書き)

更新遅れてすみません！

更新意欲がわかなかつたんですけど、やっぱり、同じく原作の二次創作を読むとやる気が湧きますね。

松竹梅秋先生の「異世界人の憂鬱」は読んでてすごく書く意欲湧きますし、個人的に面白いです！

勝手に他の小説を使ってしまいすいません。

では！前書き長くなりましたが読んでくれるとありがたいと思います。

もう一人の「俺」

「はあ」

無駄に蒸し暑い夏の夜。とは言っても、夏の夜なんて、いつも蒸し暑いものなのだが。

今日は八月二十八日。もう少しで夏休みを終え、二学期に入るところだ。

この一ヶ月、特に特記すべきものはない。これまでの事が嘘のように何かが抜けたような毎日だった。情報統合思念体との接触もないし、未来人との接触もない。もちろん超能力者の連絡もなかった。強いて言えばハルヒとのメールでのやりとりが多くなった事だろうか。

まあ、殆どが宇宙人、超能力者、未来人、異

世界人はいるだろうかなどの普通の中学生では絶対にする事はないようなやり取りだが。

ああ、そして、何故かキヨンの妹にがつくんと呼ばれるようになってしまった。呼ばれた時にキヨンの笑い声が無性にイライラしてしようになかったが、まあそこは我慢した。

さて、こんな俺が何故夏の夜に外に出ているのか、理由は特にない。まあただの散歩だ。別に好きな訳ではないのだが、ハルヒとの不思議探検から何故か暇な時は外出する事が多くなった。癖だろうか？まあ、そんな訳で俺は今、公園でコンビニで買ったおにぎりをベンチで食っている。この公園はもともと人通りが少ないため、車の通る音と、ライトの薄暗い光しかない。何かが出てきそうだが、そん

なものより怖いものを俺は知ってきた。まあなんとかなるだろう。出てきた場合の話だが。

そんな事を思ってる自分に苦笑していると、後ろからドスンと言った音が聞こえた。

「なんだ？」

まさか、ホントに出たんじゃないだろうか？

とか言う言葉が頭を横切ったが、その前に体が後ろを振り向いていた。

まあ、後ろにはある意味お化けや妖怪なんかより怖い人物を見つけた。

「いつてえ……………どこだ……………」

そう、そこには「俺」がいた。

「で、何時なんだ？ここは」

「……七夕の後の八月二十八日。つまりお前……いや、「俺」が中一の時だ。で、お前は何時の時代の俺だ？」

北高制服をまとった「俺」はしばらく目を閉じていたが、目を開けるといきなり現れたのが俺で多少ビクツとしていたが、すぐに冷静を保って俺に唐突に何時の時代か、と聞いて来やがった。俺はしばらく目を開けたままだった。まさに空いた口が塞がらないとはこの事だ、と今更ながら思う。

「なるほど、と言う事は俺は過去に飛ばされちゃったのか……」

「おい、未来の「俺」聞いてんの？」

「ああ。聞いてる聞いてる」

「じゃあ答えてくれよ」

「言えない」

「はあ？」

俺が教えたのに、なんで自分は教えないんだよ。と、言おうと思っ
た瞬間、「俺」の方が
喋り出した

「ああ、分かってる。なんでお前が質問に答えて、俺が質問に答え
ないか。だろう？お前の質問は」

「なんで、わかんだよ」

「そりゃ、当たり前だ。俺はお前。お前は俺だ。という事はお前が
今、俺に会っているという事は、俺も今の「俺」に会っているとい
うことなんだよ」

「ああ……なるほど」

一瞬、頭がおかしくなったが、なんとか理解する。おかげで、状況
をすぐ理解した「俺」に理解ができた

「で、答えない理由はだな。そうだな……朝比奈さん風に言えば既
定事項とでも言うか。つまり、その時の「俺」つまり今の俺がそう
言ったからだ」

「と言う事は今の言葉ももう一人の「俺」が言った事か」

「まあ、そうだな」

ここで、お互い苦笑しあう。考えてみれば初めてお互いで笑いあっ
た改めてみるともう一人の「俺」は俺よりも身長がもちろん高い。
この服装からみると冬服だから来た季節が冬場という事が分かった。

「しかし、俺もここにいれる時間も少ない。やれやれ。行ったり来たりだな」

「未来にいったの？」

「さあ……どうだろうな？」

流石「俺」だ。とぼけた振りが上手い。と言ってもマジで行ってないかもしれないが

「くっ……」

「どうした？」

「頭が痛くなってきた。スマン時間が来たみたいだ」

「もうか？じゃあ一つだけ聞きたい」

「なにをだ？」

「今でもこの世界は面白いか？」

そういうと、苦痛を抑えながら笑顔を見せて

「あ……あつたりまえだろ。あい……変わらず……団長様がうるさい……がな」

「そうか……そりゃあ良かった」

「お前と……過ごし……た時間。昔を思い……出して面白……かっ
たぜ」

そう言った瞬間、俺の意識も遠くなって来た

そのまま流れに身を任せる。どうせ未来人さんの策略だろう。反抗
しないのが一番だ

そのまま深い眠りについた

「……と……と」

「うん？」

うっすら目を開ける。明かりが眩しい

「大丈夫か？お前、玄関前でおにぎり持ったまま寝てたぞ」

目前にはキヨンがいた。

「え？マジ？」

「ああ。すぐ見つかったから良かったけどな」

「そうか。そりゃあ良かった」

「良かったじゃねえよ。俺がお前の寝室まで運んでやってたんだから。感謝してくれよ」

「サンキユ」

そう言いながら喉が痛くないかなど確認しているとまたもやキヨンが口を開いた

「そっぴゃ、お前おにぎりと一緒に手紙を持ってたぞ」

「手紙？」

「ああ、これ」

そう言っただけで見た手紙にはご存知の未来人さんからの手紙だった

「ゴメンね。眠らせちゃいました。大丈夫です。既定事項通り行っただけで。では、またどこかで」

「誰なんだ？可愛い書き方だか女子か？」

「さあ、どうだろうな？」

「？まあいいか。早く来いよ。朝食の準備ができてる」

そう言っただけで俺の部屋を出て行った

「俺か」

そう言っただけでまた楽しみが増えたと思いつつ、リビングへ急いだ

もう一人の「俺」(後書き)

感想、よろしくお願いします！

ぜひアンケートにも協力を！もちろんヒロインいなくてもいいんじゃない？っていう事でも大丈夫ですよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2475u/>

涼宮ハルヒの世界へ・・・

2011年12月18日07時51分発行